



成蹊大学 ボランティア 支援センター

2025年度

年次報告書



目 次

巻頭言	1
ボランティア支援センターについて	3
第Ⅰ章 活動報告	5
第1部 センターによる活動報告	
1 テーマ事業「学生×地域社会課題プロジェクト」	
2 ボランティア活動等の推進	
3 ボランティア活動等の意識向上・啓発活動	
4 ボランティア活動等の教育研究活動	
5 ボランティア活動等の広報及び情報発信	
第2部 学生によるボランティア活動報告	
1 ボラセンプロジェクト チーム 2025	
2 学生スタッフ Seivior	
3 学生ボランティア団体サポート制度登録団体	
第Ⅱ章 活動実績	47
1 2025年度実績一覧	
2 相談実績	
3 成蹊ボランティアパートナー団体制度 承認団体一覧	
4 ガイドラインパス団体一覧	
5 社会活動支援奨学金実績	
6 学内募金活動実績	
7 刊行物一覧	
8 報道等採録	
第Ⅲ章 資 料	59
1 構成員一覧	
2 会議開催日程	
3 関連規則	

巻 頭 言



成蹊大学長 森 雄一

防災への学びと実践

2025 年 12 月に開催した「SEIKEI 防災フェス 学生と考える“もしも”のチカラ」は、本学にとって極めて意義深い取り組みとなりました。学生が主体となり、自らテーマを設定して課題を抽出し、その解決策を検討したうえで、成果を学内外へ積極的に発信したことは、参加した学生一人ひとりの成長を確かなものとしたと感じています。また、地域住民や専門家の方々との交流を通じて、多様な視点から防災について考える機会を得られたことも、本フェスの大きな成果と言えるでしょう。

一方で、成蹊学園にとって防災は、単なる学習テーマを超えた現実的かつ切実な課題です。2011 年（平成 23 年）3 月 11 日 14 時 46 分に発生した東日本大震災は、学園に深い教訓を残しました。当日、学内に留まらざるを得なかった多くの学生・教職員の受け入れ、夜を徹して続く余震への対応、放射線漏れへの不安が広がるなかでの情報収集と判断、さらには飲料水を含む物資不足や電力不足への即応など、短期間にさまざまな困難が押し寄せました。学園関係者は一丸となり、限られた環境のなかで最善を尽くすべく知恵を結集し続けました。

これらの経験は、本学園における防災教育の重要性を一層明確にするとともに、今回の防災フェスにも確かに生かされています。今後も、学生が主体的に学び、多様な人々と協働しながら“もしも”に備える力を育む場を継続的に作り出していくことが、学園としての大きな使命であると考えています。

そのなかで、ボランティア支援センターの果たす役割は極めて重要です。センターが持つ行動力と発信力が、学園全体の防災力向上を大きく前進させてくれることを期待しています。



成蹊大学ボランティア支援センター所長 境 広志

ボランティア支援センターでは、2025 年度も学生の主体的な社会参画を支える多様な取り組みを展開してまいりました。

本年度の大きな特徴として、新たなテーマ事業「学生×地域社会課題プロジェクト」を実施しました。本事業は、2024 年度後期よりプロジェクトメンバーを募集し、学生と地域市民の双方にとって重要な課題である「防災」をテーマに設定したうえで、長期的な視点から検討と実践を重ねてきました。その成果として、2025 年 12 月に「SEIKEI 防災フェス」を 6 号館および本館周辺にて開催し、多くの学生・教職員・地域の方々にご参加いただく機会となりました。

また、今年度も一般学生向けに 21 件、センター登録団体向けに 1 件のボランティアプログラムを実施し、学生のボランティア活動の推進と意識啓発に継続的に取り組んでまいりました。各プログラムの詳細については、本報告書をご覧ください。

さらに、広報・情報発信の強化として、学生ラウンジ壁面へのディスプレイ設置を行い、5 月より各種イベントや活動情報の積極的な発信を開始しました。センター内の設備についても、大型ホワイトボードの設置やテーブルの更新、活動内容が外からも見やすくなるよう廊下側ガラス面の改修などを行い、学生がより活発に交流し、活動できる環境整備を進めてまいりました。

これらの取り組みは、多くの学生、教職員、地域のみなさまのご理解とご協力に支えられて実現したものです。心より感謝申し上げます。本センターは、今後も学生と地域をつなぐ拠点として、社会課題に向き合う学びと実践の場を広げてまいります。

ボランティア支援センターについて

(センターの目的)

成蹊大学における学生及び教職員によるボランティア等の地域・社会貢献並びに地域交流活動(以下「ボランティア活動等」という)に対する意識の高揚を図り、学生及び教職員が行うボランティア活動等について支援する。

(センターの事業)

上記目的を達成するため、次の(1)～(6)をセンターの事業として取り組む。

(1)テーマ事業

社会からのニーズや学生の興味・関心にあわせて年度ごとに設定し、ボランティア支援センターとして重点的に取り組んでいくもの

2025 年度テーマ事業：「学生×地域社会課題プロジェクト」

(2)学生・教職員のボランティア活動等の推進に関する企画立案、運営及び支援に関すること

ボランティア活動を体験も含めて後押しし、推進していく取り組み

(例)成蹊ボランティアプログラム、はじめてボランティア、地域連携活動など

(3)学生・教職員のボランティア活動等の意識向上のための啓発活動に関すること

ボランティア活動の意義や価値、魅力を学内外に広め、意識を持たせる取り組み

(例)ボランティアガイダンス、ボランティアカフェ、秋のボランティアウィークなど

(4)学生・教職員のボランティア活動等に関する教育研究活動に対する企画・支援に関すること

学生及び教職員の自発的で主体的なボランティア活動を後押しする取り組み

(例)各種相談事業、社会活動支援奨学金、学生ボランティア団体サポート制度、学生スタッフ制度など

(5)学生・教職員のボランティア活動等に関する広報及び情報発信に関すること

上記 1)から 4)の活動に関する各種広報及び情報発信

(例)年次報告書を含め各種冊子類の発行、WEB サイトの運営、メールマガジンのポータルサイトでの発信、学生スタッフによる X(旧 Twitter)での発信など

(6)その他センターの目的の達成のための必要な事項

第 I 章

活動報告

第 1 部

センターによる活動報告

第 1 部では、2025 年度における主な活動の報告を行う。

1 テーマ事業「学生×地域社会課題プロジェクト」

①プロジェクト概要報告

②「SEIKEI 防災フェス 学生と考える“もしも”のチカラ」イベント報告

2 ボランティア活動等の推進

①成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「学習支援ボランティア」

②成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「ユニバーサルな社会を考える①」

③成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「海外教育支援ボランティア」

④成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「ユニバーサルな社会を考える②」

⑤成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「森林ボランティア」

⑥成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「防災・減災ボランティア」

⑦成蹊ボランティアプログラム (SVP) 参加者のつどい

⑧はじめてボランティアプログラム

⑨学生による地域連携活動等

3 ボランティア活動等の意識向上・啓発活動

①ボランティアカフェ～国際ボランティア編～

②秋のボランティアウィーク

4 ボランティア活動等の教育研究活動

①ボランティア交流パーティー

②学生ボランティア団体サポート制度

③ボランティア支援センター学生スタッフ Seivior ミッション：クリーンポッシブル

④ボランティア支援センター学生スタッフ Seivior 子どもの貧困セミナー

⑤ボランティア支援センター学生スタッフ Seivior 映画上映会&ワークショップ

⑥学生の挑戦と共創の場 社会貢献活動×学生プロジェクト活動 成果報告会 2025

5 ボランティア活動等の広報及び情報発信

①学生へのボランティア情報発信強化に向けたサイネージ設置

1) テーマ事業「学生×地域社会課題プロジェクト」－①

プロジェクト概要報告

〈ポイントと狙い〉

○地域の社会課題から学生が自らテーマを選び、学生主体で運営する。

○地域の社会課題に関するイベント（ワークショップや座談会など形式も選択）を実施し、学生・教職員の地域・社会貢献活動等に対する意識の高揚となる機会を提供する。

期 間 2024年12月～2026年3月

参加者 学生9名

協 力

- 武蔵野市総合政策部企画調整課 齋藤淳一氏、佐々木要一氏、君塚正隆氏
- 武蔵野市民社会福祉協議会・ボランティアセンター武蔵野 三藤和寛氏
- 株式会社ひとのね 中村勇太氏
- 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター 佐々木俊介氏

2025年度以降のテーマ事業の在り方について、2024年度の企画執行委員会で学生からの意見を取り込むことと武蔵野市を含めた地域社会との連携をテーマに取り上げることを主とした意見が挙げられた。これを受け、学生によるプロジェクトとして実施することとし、前年度の秋から募集を開始した。

まず、気になる事例とそこで感じた課題を挙げていき、自身で調べ、考える時間を設けた。その上で話し合い、テーマを「災害（防災）」「子ども」「障がい者」の3分野に絞り込んだ。その後、武蔵野市における各分野の課題を知る機会、市民活動の現場の状況や具体的な事例を学ぶ機会、活動にあたって必要な考え方やフィールドワークの心得を学ぶ機会と様々な研修を実施した。インプット期間を経て、学生は万人にとって重要な「防災」をテーマに選んだ。テーマを決めるところからのスタートは主体性を促す効果がある反面、自らゴールを設定することに苦労している様子だった。どういった形で地域社会課題に取り組むべきか議論を重ねた結果、防災啓発イベントを学

内で実施することを決めた。

多くの防災体験ができる池袋防災館に足を運び、VR体験等が有効かを検討したり、非常食の試食会を実施した上で保健所に必要な確認を行ったり、適宜準備を進めた。武蔵野消防署への協力依頼をはじめとし、武蔵野市防災安全部防災課、広報に関しては武蔵野市市民部市民活動推進課からもアドバイスをいただいた。

「プロジェクトを通じて対話力等の向上を実感できた」「自己成長を重視する仲間と出会えたことで、自分の意識が大きく変わった。ボランティア活動をはじめ様々な活動に積極的に取り組んでいきたい」「自分にはない新たな視点に触れることができ、とても楽しかった。今後は何かしらの形で継続した防災活動を行う枠組みを作りたい」等の感想があり、学生にも意識の変化が見られた。

年次報告書の執筆と3月の成果報告会での発表でプロジェクトを締め括ったが、次年度以降は、過年度の成果やノウハウを蓄積・共有し、後続のプロジェクトが引き継ぎながら発展させていける体制の構築を検討したい。

1) テーマ事業「学生×地域社会課題プロジェクト」-②

「SEIKEI防災フェス 学生と考える“もしも”のチカラ」イベント報告

〈ポイントと狙い〉

○体験型プログラムを通じて、楽しく防災知識と実践力を身につける。

○防災について考えるきっかけと防災意識向上につながる機会をつくる。

日 時 12月6日(土) 10:00~15:00

場 所 大学6号館6階および本館付近

参加者 70名(本学学生・教職員・一般)

内 容 【体験イベント】

- ① 10:00~15:00 防災訓練VR・防災ゲーム体験
- ② 10:00~11:50 煙体験・消火体験・消防車展示
- ③ 12:00~13:00 非常食試食会
- ④ 13:00~14:30 救命救急講習(消防署員による講習)
- ⑤ 10:00~15:00 クイズラリー

【展示ブース】

- ①防災に関するパネル、②防災グッズ、③非常食に関するパネル

主 催 成蹊大学ボランティア支援センター

企画・運営 ボラセンプロジェクト チーム2025

協 力 東京消防庁 武蔵野消防署
成蹊大学ボランティア支援センター学生スタッフSeivior



防災に関する知識と実践的な対応力を楽しみながら身につけることを目的として、体験型の防災啓発イベント「SEIKEI防災フェス 学生と考える“もしも”のチカラ」を開催した。災害時の共助の重要性から成蹊学園全体および武蔵野市内へも広く周知し、地域にとっての防災啓発の機会となることも目指した。

当日は、地域住民や市内の関係団体の委員、市報やチラシを見た市民、教職員が子どもを連れて来場するなど、多世代の来場があった。救命講習にも、地域住民、本学学生から成蹊小学校に通う児童と保護者まで、多くの参加があり、熱心に取り組んでいた。来場者が会場内を巡り、複数の防災テーマに触れられるよう取り入れたクイズ

ラリーが功を奏し、各ブースを楽しむ様子が見られた。

運営する学生達は良い連携を見せ、子どもに寄り添った声かけや、楽しみながら学べる工夫を随所で行って、来場者からも「スタッフの皆さんがとても親切で感じがよく、楽しく参加できた」との高い評価を得た。本学学生の参加が半数にとどまった点は課題として残ったものの、「VR体験や防災ゲームなど、楽しく防災への理解を深められた」、「必要な情報がまとめられた展示で、分かりやすく学べた」等の感想が多く、学内外の幅広い層に防災の重要性を伝える機会となった。



2) ボランティア活動等の推進－①

成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「学習支援ボランティア」

〈ポイントと狙い〉

○学習支援が必要な子どもの背景や状況について学び、社会課題について考える。

○勉強を教えるだけでなく一人ひとりに寄り添うことが大切であることを体験を通じて学ぶ。

日 時

①【事前ガイダンス・事前研修会】

5月15日(木) 12:30～13:00 (ハイブリッド開催)

5月16日(金) 12:30～13:00 (対面開催)

②【ボランティア体験】

5月17日～6月20日の間に1回以上活動

③【振り返り】

6月23日(月) 15:00～16:00 2名

6月25日(水) 15:00～16:00 2名

6月26日(木) 15:00～16:00 5名

6月27日(金) 15:00～16:00 2名

※その他2名は個別対応



場 所

①、③ ボランティア支援センター

② 一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク アスポート学習支援で展開している埼玉県内50教室のうち、学生が選択した任意の教室

講 師

横田藍氏、折原悠子氏、渡部泰史氏 (一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク アスポート学習支援・本部)

参加者

学生13名

参加学生はボランティア体験として、希望した教室でそれぞれ活動した。子どもとの関係性をつくり、よりよい活動と学びとするため、複数回の参加を推奨したところ、回数を重ねて活動した学生は約半数の7名に上った。

事前研修では、団体担当者に加え、昨年度の同プログラムに参加し、現在も継続して活動している学生から、自身の学びや成長についてや教室の様子の説明があった。

振り返りでは、考えを整理するためにレポートを提出した後、対面での振り返りを1時間設定し、協力団体の担当者にも出席いただいた。丁寧なフィードバックと、活

動体験や感想を学生同士で共有したため、モチベーションが高まり、今後も別の教室で活動したいといった継続に前向きな声があがった。さらに、教室運営において子どもたちがより楽しく、積極的に学習に取り組むために、名札を利用するというアイデアを提案し、取り入れていただいたことがあった。

「様々な環境にいる子どもたちの現状を知ることができた」「自分の価値観を見直す必要があると思った」といった感想もあり、視野が広がり、支援が必要な子どもの状況や自分たちができることを考えるきっかけをつくることができた。

2) ボランティア活動等の推進－②

成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「ユニバーサルな社会を考える①」

〈ポイントと狙い〉

○自分ではない誰かの視点に立ち、見て、考え、行動するきっかけにする。

○障がいの有無にかかわらず、ひとりの人として尊重し合う姿勢を学ぶ。

日 時

- ①【事前ガイダンス】
5月19日(月) 17:00～18:00
- ②【ユニバーサルマナー検定3級受講】
5月26日(月) 17:00～18:30
- ③【ボランティア体験】
6月中に6つの実施日を設け、その中から
各自が希望施設で1回体験
- ④【振り返り】
7月3日(木) 12:30～13:00 5名
7月4日(金) 12:30～13:00 5名
7月7日(月) 12:30～13:00 5名



場 所

- ①、② 大学3号館301教室
- ③ 本学近隣にある下記の協力団体施設
- ④ ボランティア支援センター

協 力

- ボランティア体験受け入れ先
- ・NPO法人KITARU 就労センターKITARU
- 精神障がいのある方の就労支援等
- ・公益財団法人武蔵野市福祉公社 北町高齢者センター
- 高齢者のデイサービス等
- ・社会福祉法人武蔵野 デイセンター山びこ
- 知的障がいのある方の生活介護事業（通所施設）

参加者

学生15名

本プログラムでは、事前研修として「ユニバーサルマナー検定3級」を受講し、多様な人と接する際のマインドや具体的なアクションについて学んだ。その後、大学から徒歩圏内の3つの福祉施設のうち、各自が希望する施設にてボランティア体験を行った。

例えば、就労支援センターKITARUでのキッチングループの活動では、利用者の方々と学生が、その日の昼食のメニューを相談して決め、スーパーに行き予算内で材料を購入し、協力しながら調理をした。完成後には一緒に食べて、片付けまで行った。活動の中で、利用者の方々と学生との間に自然にコミュニケーションが生まれ、協力

し合う姿が印象的だった。

他の各施設でも、最初は緊張していた学生も徐々に利用者の方々と自然なコミュニケーションが取れ、笑顔が多く見られた。

振り返りでは、「障がいの有無や年齢にかかわらず、まずは相手をよく知ろうとする姿勢を大切にしたいと考えるようになった」「障がいのある方に対して、自分が支える立場だと考えていたが、実際に話してみると、お互いに学び、支え合う関係が自然に築けることに気づいた」といった声が寄せられた。

本プログラムを通して、学生は多様な人々への理解を深め、向き合う姿勢を身につけることができた。

2) ボランティア活動等の推進－③

成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「海外教育支援ボランティア」

〈ポイントと狙い〉

○インドやバングラデシュの子どもたちが置かれている状況を理解し、どのような支援が必要かを学ぶ。

○現地の子どもたちが学ぶための教材を作成することを通し、支援することの意義を考える。

日 時

【事前研修・ボランティア体験】

5月24日（土）13：00～15：30

【振り返り】

体験当日に振り返りまで行い、後日、各自がレポートを提出する形とした。



場 所

ボランティア支援センター

講 師

辻丹美 氏（認定NPO法人ESAアジア教育支援の会 事務局長）

参加者

学生9名

認定NPO法人ESA アジア教育支援の会（以下、ESA）の事務局長である辻丹美 氏を講師に招き、インドおよびバングラデシュの教育支援をテーマとした研修とボランティア体験、振り返りを実施した。

前半の研修では、ESAが長年取り組んでいる教育支援活動についてご講演いただいた。子どもたちが教育を受ける権利を十分に得られていない現状やその背景、これまでの支援の取り組みと成果について、動画や写真を交えて紹介され、学生たちは真剣に耳を傾けていた。

後半のボランティア体験では、現地の子どもたちの教材となる「ORIGAMI BOOK」を学生一人につき一冊作成した。完成見本

の折り紙を折ることから始まり、切り絵やシールを使った表紙の装飾、ベンガル語での名前記入、英語でのメッセージ記入など、学生たちは最後まで丁寧に取り組んでいた。また、現地で日常的に飲まれているチャイ（スパイス入りミルクティー）を学生たちに提供したところ、大変好評であった。このチャイは、ESAが支援活動の一環として販売しているスパイスキットを使用して作ったものである。

当初から「海外支援」「子ども」「教育」といった分野に関心を持っていた参加学生にとって、本プログラムはその知的好奇心を大いに刺激する学びとなった。

2) ボランティア活動等の推進－④

成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「ユニバーサルな社会を考える②」

〈ポイントと狙い〉

○障がい当事者や、まわりで支えている家族や支援者と直接関わることを通し、共生社会の実現に向けて必要なことについて考える。

○障がい当事者や障がい者を支える方の視点で社会を見ることで、さまざまな気づきを得る。

日 時

- ① 【事前ガイダンス】
10月8日(水) 12:30～13:00
- ② 【ユニバーサルマナー検定3級受講】
10月15日(水) 17:00～18:30
- ③ 【ボランティア体験】
10月18日(土) 11:00～17:00
- ④ 【振り返り】
10月28日(火) 12:30～13:00 6名
10月29日(水) 12:30～13:00 4名
11月6日(木) 12:30～13:00 4名



場 所

- ①、④ ボランティア支援センター
- ② 3号館201教室
- ③ 新宿けやき園 1階地域交流スペース

協 力

認定NPO法人こつこつ

参加者

学生14名

事前研修として「ユニバーサルマナー検定3級」を受講した後、認定NPO法人こつこつが主催するイベント「アートでおしゃべり」(※1)に参加し、会場設営等の運営サポートを行うとともに、イベントを通じて重度障がいのある方とのコミュニケーション方法を学んだ。学生たちは「指筆談」(※2)を体験し、障がい当事者と意思疎通ができた際には、驚きと喜びに満ちた表情を見せていた。発話が困難な方々も、適切なサポートがあれば自分のことばで気持ちを伝えられることを学生たちは身をもって実感し、貴重な経験となった。

振り返りでは、「これができない、これができると決めつけることなく、何ができてどんなニーズがあるのかを考えたり、聞いたりすることが重要だと気づいた」「障がいのある人との交流を重く考え過ぎず、同じ

人間として助け合いたいと感じた」といった声があった。また、障がいの社会モデル(障がいは社会的障壁や環境の不備によって生じるという考え方)について学べたことを評価する意見も多く寄せられた。

後日、イベントで交流した方たちが本学を訪問し、学生食堂での食事やキャンパス見学の際に、学生数名が、学食利用のサポートをするなど再び交流することができた。プログラム修了後も継続的な関わりを持てることの重要性を改めて感じた。

(※1) アート作品を見て、自分の心や頭で感じたこと・考えたことを言葉にしあう、対話型の鑑賞法体験イベント

(※2) 介助者が本人の指を手にとって、自分の指の腹や手のひらに当て、わずかな動から文字や数字、記号を読み取り意思疎通をする方法

2) ボランティア活動等の推進－⑤

成蹊ボランティアプログラム（SVP）「森林ボランティア」

〈ポイントと狙い〉

○日本の森林を取り巻く状況や課題について知る機会とする。

○「森づくり体験」を通じて、森林を身近に感じ、森林保全の重要性を理解する。

日 時

①【事前研修】

10月30日（木）12：30～13：00

②【ボランティア体験】

11月8日（土）8：30～16：30

③【振り返り】

11月13日（木）12：30～13：00 3名

11月20日（木）12：30～13：00 3名



場 所

①、③ ボランティア支援センター

② さがみの森（神奈川県相模原市仙洞寺山国有林）

協 力

NPO法人森づくりフォーラム

参加者

学生6名

事前研修では、「市民参加の森づくり」を推進し、「森とともに暮らす社会の実現」をめざして活動している「NPO法人森づくりフォーラム」の事務局長である宮本至氏よりオンラインでご講義いただいた。

宮本氏からは、日本が世界有数の森林大国であること、森林が荒廃した場合に起こりうる問題、団体として描く森づくりのビジョンについて説明があった。また、初心者である学生が安全に活動するための注意点も丁寧にご指導いただいた。

活動当日は早朝に集合し、JR橋本駅からレンタカーで活動場所まで移動した。午前中は、現場スタッフの指導のもと、間伐作業に取り組んだ。木を倒す方向を見極め、のこぎりで受け口と追い口をつくる工程は、斜面で足元が不安定なため難易度が高く、学生たちは苦戦していたが、作業後には達成感に満ちた表情が見られた。

昼食後は火起こし体験を行った。石を並

べて炉をつくり、薪や落ち葉を入れてファイヤースターターで火を起こそうと試みたが難しく、最終的にはマッチで着火することになった。焼き芋やマシュマロ、チョコレートなどを焼きながら、午前中の真剣な表情とは対照的に、笑顔で楽しむ姿が印象的だった。

最後に、ベテランスタッフのガイドで森の散策を行った。動物の足跡や植物に関する説明、森づくりのビジョンについての紹介があり、学生たちは熱心に耳を傾けていた。

振り返りでは、「間伐や火起こしといった普段できない体験ができてよかった」という声が多く寄せられたほか、「森林の空気に触れることでリフレッシュできた」、「整備された森でも歩くのが想像以上に難しかった」などの意見もあった。実際に森に足を運んだことで、参加者が多くの学びや気づきを得たことが伺える。

2) ボランティア活動等の推進ー⑥

成蹊ボランティアプログラム (SVP) 「防災・減災ボランティア」

〈ポイントと狙い〉

○災害発生時、自分や家族の身を守るための基本的な知識を身につけ、日頃からの備えの大切さを学ぶ。

○防災・減災に対する意識を高め、地域の人と協力して助け合うことの大切さを学ぶ。

日 時

- ① 【事前研修】
11月16日(日) 13:30～15:30
- ② 【ボランティア体験】
12月6日(土) 9:00～14:30
- ③ 【振り返り】
12月12日(金) 12:30～13:00

場 所

- ①、③ ボランティア支援センター
- ② 東京都立小金井公園

講 師

西東京レスキューバード
荘雄一朗 氏、荘祐紀子 氏、立元博史 氏

参加者

学生6名



西東京市を拠点に活動している団体「西東京レスキューバード」の協力のもと、防災に関する基礎知識や、平時および発災時に市民としてできることについて学んだ。

事前研修では、団体代表の荘雄一朗 氏を含む3名の方に講師を務めていただき、「災害ボランティアセンター」についての説明や、研修後に参加する「防災フェスタ」での活動内容についてお話しいただいた。また、来場者向けのぬりえ（避難時の持ち出し品について考えるきっかけとなる取り組み）を学生自身で体験する時間もあった。

さらに、講師のおひとりであり本学卒業生でもある荘祐紀子 氏からは、学生時代から現在に至るまでのボランティア経験や、活動に込めた思いについてお話しいただいた。参加学生は、年齢の近い先輩の言葉に熱心に耳を傾けていた。

ボランティア体験としては、東京都立小金井公園で開催された「防災フェスタ」において、西東京レスキューバードが運営するブースのスタッフとして活動した。具体的には、マンホールトイレ体験、ぬりえコーナー、防災スタンプラリー受付・景品配布をローテーションで担当し、次々訪れる来場者の方々に丁寧に対応した。とくに、親子連れが多く参加した、ぬりえコーナーでは、ハサミ使用時の安全への配慮や、満席時の対応など、状況に応じた判断が求められる場面も多く、学生にとってよい学びとなった。

当日は、朝早くから寒い中での屋外活動となったが、参加学生は来場者との交流を積極的に楽しみながら、防災についてしっかり向き合う1日となった。

2) ボランティア活動等の推進－⑦

成蹊ボランティアプログラム（SVP）参加者のつどい

〈ポイントと狙い〉

- SVP修了者に対し、ボランティア活動への継続的な参加を後押しする。
- 学生視点での意見を収集し、今後のSVPの企画・運営に反映させる。
- 学生同士の交流と情報共有を促進する。

日 時 3月27日（金）10：00～12：00

場 所 ボランティア支援センター

参加者 6名（学生2名、教員1名、職員3名）



SVPでは開始当初より、年度ごとに一定の基準を満たした学生を表彰する制度を設けてきた。しかし今年度は、参加時期の違いによる不公平感といった諸所の理由により表彰は行わず、学生同士の交流・情報交換、センターから学生への情報提供、学生からの意見収集を主な目的としたフォローアップとして、本企画を実施した。

本企画について、2025年度SVP修了者54名を対象に、ポータルサイトおよびメールにて案内を行い、フォームによる出欠確認を行った。春休み期間中であったことも影響し、回答者28名のうち、出席の申し込みは3名であった。

当日は、申込者のうち1名が体調不良により欠席となり、最終的には2名の参加となったが、少人数であったことにより、学生一人ひとりが安心して自分の経験や考えを語ることのできる、落ち着いた雰囲気での交流が実現した。

冒頭では、境 広志ボランティア支援センター所長も参加し、アイスブレイクを兼ねて「十人十色ゲーム」を行った。本ゲームは、人により価値観が多様であることを改めて実感するとともに、他者の視点を意識することの意味や意義を考えてみるきっかけ

けとなった。学生と教職員が、それぞれの立場を意識することなく、フラットな関係で楽しく交流できた貴重な時間となった。

その後、2025年度SVPにおいてご協力いただいたNPO法人や施設などで参加できるボランティア活動についての情報提供を行うとともに、来年度SVPの概要を紹介した。この場では、学生にとって役に立つ資料の内容や提示方法について意見交換が行われた。

最後に、SVP全体について自由に意見を述べてもらう時間を設けた。ここで得られた意見は、今後のSVPの企画・運営を検討するうえで参考にしたいと考えている。

参加した2名は学年や学部が異なるものの、教職課程を履修しているという共通点があり、会の終了後もしばらくの間センターに残って交流を続ける様子が見られた。

今回は表彰を実施しなかったこともあり、結果として参加は少数となったが、参加学生一人ひとりと丁寧に向き合い、率直な意見を聞くことができた点は、本企画の成果であると捉えている。次年度以降も、SVP修了者に対するフォローアップのあり方について、より効果的な方法を模索していきたいと考えている。

2) ボランティア活動等の推進－⑧

はじめてボランティアプログラム

〈ポイントと狙い〉

○ボランティアに興味があっても一歩が踏み出せない学生に対し、気軽に参加できるボランティア活動の体験の場を提供する。

○初めて活動する学生が安心して参加できるよう、ボランティアコーディネーターが同行し、ともに活動する。

事例 「けやきまつり運営サポートボランティア」

日時 5月18日(日) 9:00～16:30

場所 けやきコミュニティセンター(以下、けやきコミセン)

参加者 10名(学生9名、職員1名)

内容 けやきコミセンの運営委員や地域住民、学生ボランティア等が協力してつくり上げる「けやきまつり」に運営スタッフとして参加した。ドライカレーの販売、バザー会場、ごみ回収所の3ブースのサポートを担当したほか、会場全体の準備や片付けまで担った。



はじめてボランティアに参加することや、ひとりで参加することに不安を感じているボランティア初心者の学生を対象に、本年度は3つのプログラムを実施した。

最初は、上記事例で紹介した「けやきまつり」の運営サポートである。来客数や売れ行きに応じて臨機応変な対応を求められる場面もあったが、学生同士の連携がスムーズであったため、トラブルなく活動できた。けやきコミセンの方々から感謝の言葉を多くかけられ、学生のモチベーション向上につながった。

7月には「プランター植栽ボランティア」を実施した。こちらは、本学のサステナビリティ教育研究センターとのコラボレーション企画であり、職員の参加もあった。普段あまり接点のない学生と職員が花の植替え作業をしながら交流できたこと、活動場所が学内であったため参加しやすかったこと

が参加者に好評であった。そのため、11月にも同様の形で再度実施したところ、教員の参加も見られた。9月には、本センターの学生スタッフSeiviorが主体となって企画した「ミッション：クリーンポッシブル」というごみ拾いイベントを開催した。2チームに分かれ、17時に大学をスタートし、井の頭恩賜公園までの道のごみ拾いをした。ごみの種類ごとに環境負荷に応じて得点をつける仕組みを導入し、ゲーム感覚で楽しめるような工夫もあり、参加者は和気あいあいと取り組んでいた。道中、地域の方から感謝の言葉をかけていただく場面もあり、学生たちの励みになったようだ。

「はじボラ」は、コーディネーターが学生と一緒に活動をする中で会話をする時間を多く取れるので、参加した学生ひとりひとりのニーズを捉え、一歩踏み出した学生を次の活動につなげられるようにしたい。

2) ボランティア活動等の推進－⑨

学生による地域連携活動等

〈ポイントと狙い〉

○本学が所在する武蔵野市を中心に、近隣地域と連携し、地域貢献に努める。

事例 練馬区立関町リサイクルセンター「こどもクラブ」の学生サポーター

日 程 2025年4月から2026年3月までの毎月第3土曜日
※その他のイベントについても協力（3R推進月間センター祭りなど）

参加者 成蹊大学ボランティア支援センター学生スタッフ Seivior 有志

主 催 練馬区立関町リサイクルセンター

練馬区立関町リサイクルセンター（以下、関町リサイクルセンター）が開催する、小学1～6年生を対象にした地球や環境に関するプログラム「こどもクラブ」において、学生サポーターとして、学生スタッフ Seivior が1年を通して活動した。環境問題への関心が高まる中、子どもたちが身近な自然や環境について学ぶ機会を支えることは、より良い学びの場づくりにつながる。また、学生自身が地域活動に参加することで、社会貢献への意識を高め、コミュニケーション力や柔軟な対応力を養う機会となる。地域貢献に加え、これらも目的として、自主的に活動を行った。

関町リサイクルセンターからの相談がきっかけとなり、学生スタッフに話をしたところ、「やってみたい」と手が挙がり、活動することが確定した。毎回のプログラムでは、主催者スタッフと、運営の中心となる地域のボランティア数名とともに活動した。毎月同じ学生が参加するのが理想的だが、都

度「活動報告書」を作成して学生間で共有することで、誰が参加しても、これまでの状況がわかるように工夫した。

さらに、関町リサイクルセンターから協力依頼があり、「子ども講座・リユースして作って遊ぼうレーシングカー」（8月24日開催）、「3R推進月間センター祭り」（11月16日開催）においてもボランティアとして活動した。また、次年度に向けてイベントでのブース出展を実施することもご提案いただいた。学生スタッフは、月に1回の「こどもクラブ」の活動については継続の意向を示したものの、ブース出展は余力がないとの判断となり、実現しなかった。次年度以降、学生スタッフとしてブース出展することも視野に入れて活動することも期待される。

こうした活動が地域社会とのつながりを深める契機となり、地域と学生の関係の深化および活動の発展につながることを目指したい。

3) ボランティア活動等の意識向上・啓発活動ー①

ボランティアカフェ～国際ボランティア編～

〈ポイントと狙い〉

○ボランティアに参加したい学生と活動先とをつなぐため、直接話ができる機会を創出する。

○さまざまな活動を紹介し、参加者が関心のある分野に気づくことを促す。

日 程 5月23日(金) 12:30～13:30

場 所 ボランティア支援センター

協 力 認定NPO法人CFF ジャパン

参加者 学生13名

内 容 前半は登壇者による活動紹介等を行い、
13:00からは希望者による個別相談会
とした。



昨年度も好評であった「国際ボランティア」をテーマとしたボランティアカフェを開催した。開催時期は、学期末試験で忙しくなることも考慮し、夏期休業期間に向けて計画を立て始める時期に開催した。当日参加できなかった学生が個別に話を聞きに来るなど、関心の高さが感じられた。

認定NPO法人CFFジャパン事務局の方から団体の紹介やフィリピン・マレーシアで実施されるプログラム概要について説明があった後、実際に海外ボランティアプログラムに参加した本学学生2名、他大学の学生3名から、活動や体験についての話があった。

社会課題解決に向けた取り組みとして、ワークキャンプ（作業を中心とした活動）、スタディーツアー（貧困地区や社会福祉施設等の訪問や活動体験を通じて現地事情や住民との相互理解を図るもの）、スタディークャンプ（ワークキャンプとスタディーツアーの両要素を含むもの）とプログラムは3つに大別されるが、それぞれのプログラムに参加した学生がおり、全員から話を聞くことができた。

参加学生にとっては、同じ学生からの体験談は、親近感を持つことができ、興味深い様子だった。アンケートでの満足度も高く、「実際にボランティアに参加した方からたくさんのお話を聞いた」「実際の体験談がとても現実的で理解しやすかった」といった声が多かった。

昨年のボランティアカフェをきっかけに実際にプログラム参加し、活動の魅力を自ら語る側となった本学学生も登壇者として活躍した。さらに、プログラムに参加した本学学生から、来春のプログラムと活動の紹介をしたいとの相談があり、今年度2度目のボランティアカフェも12月に開催した。

認定NPO法人CFFジャパンの活動は、学生が中心となって広報活動まで担うことが特徴的で、そのために活動経験者からの生き生きとした声が聞けるだけでなく、学生ならではの勢いがある。毎回、新しいプログラム参加者が出てくるのは素晴らしい流れではあるが、同じ団体の活動紹介に偏ることがないように配慮しつつ、学生たちの「やってみたい」という気持ちを後押ししていきたい。

3) ボランティア活動等の意識向上・啓発活動ー②

秋のボランティアウィーク

〈ポイントと狙い〉

○ボランティアウィークを通して、学生たちに社会課題を考えるきっかけを与える。

○ボランティア活動や社会貢献活動を知る機会を提供し、ボランティアの普及・啓発を行う。

日 時 10月20日(月)～27日(月)

場 所 ボランティア支援センター (①、②、④、⑤)
11号館ラーニングコモンズトリウム
1階プレゼンエリア (③)

協 力 ボラセンプロジェクト チーム2025
NoSide (ユニバーサルスポーツボランティア)
成蹊大学ボランティア支援センター学生スタッフ Seivior

参加者 のべ87名(学生82名、教員1名、職員4名)

内 容	①防災カードゲーム	(10/20)
	②ユニバーサルスポーツ (ボッチャ体験)	(10/22)
	③リサイクル活動の推進 (コンタクトレンズ空ケース回収ボックスに関する説明)	(10/24)
	④貧困問題を家計で考える	(10/27)
	⑤防災×募金「#マイ防災ボトル、つくってみた」	(10/21、23、27)



秋のボランティアウィークと題して、気軽に参加できる体験型イベントを中心に実施した。どのイベントにおいても、初めて出会う学生同士が和やかに交流している様子が見られた。

今回は、次に実施するイベントの紹介と、それに向けた流れの検証という側面をもつ企画も実施し、参加者からの感想や反省を生かせるように工夫した。一つ目が、防災啓発イベント「防災フェス～学生と考える“もしも”のチカラ」のプレイベントとして「ボラセンプロジェクト チーム2025」が実施した防災カードゲームで、参加者の「普段考えないような防災の知識づけになった」「防災として実用的な内容を学ぶきっかけとなった」などの感想から、ゲーム自体を楽しみながら、学びを深められることが実証できた。二つ目は学生スタッフSeiviorが企画する「社会課題解決へのアプローチ こ

ども・家庭の貧困問題と私たちにできること」の内容の一部紹介する形で行った「貧困問題を家計で考える」で、時間配分や進め方を検討する機会にしつつ、イベントの広報の場とした。

学生スタッフSeiviorからはさらに、コンタクトレンズ空ケースをリサイクルすることで手軽にできる社会貢献活動とその意義を紹介した。同時に、本センターに回収ボックスを常設することを周知し、本センターでできることやアクセスについても説明した。これは1年生が担当したが、本センターに足を運んでもらうきっかけや仕組みづくりの大切さを感じてもらったと捉えている。

ボッチャ体験では、参加者だけでなくNoSideメンバーもユニバーサルスポーツの意義を再認識しつつ、互いの理解を深め、共に楽しむことができた。

4) ボランティア活動等の教育研究活動ー①

ボランティア交流パーティー

〈ポイントと狙い〉

- 学生ボランティア団体同士が交流する機会を設け、横のつながりを広げることを目的とする。
- 学生ボランティア団体に所属していても本センターを利用したことのない学生が多いことから、センタースタッフの顔を知ってもらい、今後気軽にセンターを利用してもらうきっかけとする。

日 時 12月19日(金) 17:00～19:00

場 所 大学6号館601会議室

主 催 成蹊大学ボランティア支援センター

協 力 ボランティア支援センター学生スタッフSeivior

参加者 53名(本学学生・教職員)

参加団体

- ・学生スタッフSeivior
- ・学生ボランティア本部Uni.
- ・RootSeikei
- ・お芋掘りサークル
- ・NoSide(ユニバーサルスポーツ)
- ・ボラセンプロジェクト2025



昨年度に初めて開催した「ボランティア交流パーティー」が学生に好評であったことから、今年度も同様の形式で開催した。

全体の企画はセンターが行い、当日の司会・進行やレクリエーション企画の運営は、学生スタッフSeiviorが担当した。学生ならではの視点を生かし、参加者に楽しんでもらえるよう多くのアイデアを出し合いながら準備を進め、当日は会場を大いに盛り上げた。

イベント前半では、各団体の代表から活動内容や特徴の紹介があった後、団体混合のチームを編成し、「絵しりとり」や「ビンゴ大会」を実施した。初対面同士であっても、ゲームを通じて自然と打ち解け、どの

チームも協力しながら盛り上がっている様子が見られた。

歓談タイムでは、飲食をしながら自由に交流し、積極的に他団体へ声をかける学生の姿も多く見られた。とくに、団体運営を担う幹部学生同士は、互いの課題や取り組みを共有し合うなど、有意義な情報交換の時間となっていたことが印象的であった。

参加した学生からは、「楽しかった」「来年も参加したい」といった声が多く寄せられた。本センターとしては、今後もボランティア団体同士の交流の機会を提供し、ボランティア団体全体の活性化につなげるとともに、より多くの学生にボランティアの魅力を発信していきたい。

4) ボランティア活動等の教育研究活動ー②

学生ボランティア団体サポート制度

〈ポイントと狙い〉

- 学生ボランティア団体が、より活発かつ円滑に活動できるよう、運営等のサポートをする。
- 個々の登録団体が連携することにより、本学のボランティア活動全体が盛んになるよう、ネットワークづくりをする。

事例 研修「クロスセッション：これまでとこれからをつなぐ場」

日時 11月30日(日) 9:30～12:00

場所 ボランティア支援センター

講師 中村勇太氏(株式会社ひとのね)

参加者 学生21名

対象 以下5団体の新旧幹部学生

- ・成蹊大学学生ボランティア本部Uni.
- ・RootSeikei
- ・お芋掘りサークル
- ・NoSide(ユニバーサルスポーツボランティア)
- ・学生スタッフSeivior

内容 各団体が活動の目的を再認識し、次年度も主体的かつ継続的に活動できる基盤を整えることを目的とした研修を実施した。



学生ボランティア団体サポート制度には現在4団体が登録しており、センターでは多様な支援を行っている。相談対応はもとより、ミーティングやイベント時のスペース提供、物品貸し出し、各団体の物品の保管スペースの提供等、その内容は多岐にわたる。

また、センター発行のボランティアハンドブックおよびホームページに登録団体の紹介を掲載し、学内外に向けてPRにも取り組んでいる。さらに、登録団体所属の学生を対象に、「ボランティアコーディネーション力検定」、「ユニバーサルマナー検定」といった外部団体が実施する検定受検料補助や、ニーズに応じた研修の実施等、学びの

機会の提供も行っている。

今年度は研修として「クロスセッション：これまでとこれからをつなぐ場」を実施した。内容は上記のとおりだが、新旧幹部が交代する時期に実施することで、活動の知見を次世代へつなぐ機会となるよう工夫した。研修は、終始なごやかな雰囲気の中で進行した。

旧幹部にとっては、自分のこれまでの活動を客観的に振り返る機会となり、新幹部にとっては「これから自分がすべきこと」を明確にする場となり、モチベーションの向上につながった。

4) ボランティア活動等の教育研究活動ー③

ボランティア支援センター学生スタッフSeivior ミッション：クリーンポッシブル

〈ポイントと狙い〉

- 参加へのハードルが低いボランティア活動を企画し、ボランティアを始めるきっかけをつくる。
- 参加者同士で交流しながら活動することで、ボランティア活動の楽しさを知ってもらう。

日 時 9月24日(水) 16:40~18:30
※当日の昼休みに事前説明会を実施した。

場 所 ①成蹊大学ボランティア支援センター
②武蔵野市内(成蹊大学~井の頭恩賜公園)
③井の頭恩賜公園

参加者 14名(学生11名、職員3名)



ボランティア活動がはじめての学生を対象にした「はじめてボランティアプログラム」として、気軽に参加できる短時間のごみ拾いイベント「ミッション：クリーンポッシブル」を実施した。ボランティアをはじめのきっかけづくりや、参加者同士で交流しながら活動する中でボランティアの楽しさを知ってもらうことを目的として、学生スタッフSeiviorが企画、運営した。大学周辺を知って、地域に関心を持ってもらうことも狙いとしていたが、試験期間を考慮した結果、9月の実施となり、主なターゲットであった新入生を巻き込めなかったことは残念である。

当日はお昼休みに事前説明会を行い、参加者同士の顔合わせを兼ねて、活動のルールや安全面の注意事項などを説明した。ごみの分別方法では、ごみの種類ごとに環境負荷度に応じて得点をつける仕組みも導入し、ゲーム感覚で楽しめるように工夫した。その後、チーム分けを行い、チーム名や役割を決める時間を設けて、交流を深めた。

活動は17時にスタートし、成蹊大学の

青いビブスを着用して井の頭恩賜公園まで2チームに分かれてごみ拾いを行った。道中では地域の方から感謝の言葉をかけられる場面もあり、参加者にとって励みとなった。

アンケートでは、「楽しかった」「みんなで一丸となって活動できてよかった」「今までこうした活動に参加したことがなく、貴重な経験になった」といった声が寄せられた。終始、和気あいあいとした雰囲気、一人では参加しづらい活動も、仲間と一緒に楽しく取り組めることを実感できたようだった。

活動後は、集めたごみの集計と勝敗の発表だけでなく、どんなごみが多かったか、場所による違いや特徴などを話し合い、チームごとに発表した。「普段意識していなかったごみの量を視覚化できた」「どこにどんなごみが落ちているのかがよく分かった」「分別について学べた」といった感想もあり、学びのある時間となった。最後に、今後のボランティア活動への参加につながるよう、関連情報を紹介してイベントを締めくくった。

4) ボランティア活動等の教育研究活動ー④

ボランティア支援センター学生スタッフSeivior 子どもの貧困セミナー

〈ポイントと狙い〉

- 貧困問題の現状や困難な暮らしをしている家庭・こどもたちについて理解し、関心を持つきっかけをつくる。
- さまざまな活動を紹介することで、自分にもできることがあると気づいてもらう。

日 時 11月29日(土) 10:30~13:30

場 所 大学6号館301教室

協 力 小河光治氏(公益財団法人あすのば 代表理事)
菅原直志氏(合同会社結い 代表 / 元東京都議会議員)
鈴木邦明氏(NPO法人PlanetCanal 理事長)

参加者 17名(学生8名、教員1名、職員3名、一般5名)

主 催 成蹊大学ボランティア支援センター
成蹊大学ボランティア支援センター学生スタッフSeivior



「社会課題へのアプローチ こども・家庭の貧困問題と私たちにできること」と題し、小河氏による基調講演「こどもの貧困の現状と社会における取組の変遷～困難を抱えた子ども・若者の権利を守るために～」、貧困問題を家計で考えるワーク、登壇者3名によるパネルディスカッションを3部構成で実施した。

小河氏・菅原氏の両者は交通遺児であり、当事者としての視点も持ちつつ、こどもの貧困問題解決に向かって尽力されている。調査・政策提言をする立場、また、議員として経験をお持ちの立場から、課題や必要な支援についてお話いただいた。鈴木氏は、1人暮らしに必要な家電や家具を必要でなくなる人から集め、児童養護施設を巣立つこども達に届ける活動をしている。品物だけでなく、たくさんの人が応援しているというメッセージも届けることで、こどもたちにエールを送っており、心の問題という視点も共有いただくことができた。

1か月の家計を状況別に計算し、出費を具体的に考えるワークを取り入れたことで、「問

題を自分ごととして捉えやすくなり、こうした気づきは多くの人にも知ってほしいと思った」といった感想につながった。また、登壇者の言葉を受け止め、理解を深めるステップになった。

参加者は皆、熱心に傾聴し、最後の質疑応答の時間でも、本学学生、地域住民から質問の手が挙がった。「授業や私生活でも触れたことのない内容だったが、参加してよかった」と目を輝かせる学生や、櫛祭で配布した告知チラシを目にしたという地域住民の参加もあった。「こどもの貧困問題について深く考えるきっかけとなり、問題の背景や支援の重要性を理解できたことで、自分の意識も大きく変わった」「社会問題の理解には現状を知ることが不可欠だと感じた」などの感想が多く、社会課題解決に必要な積み重ねの一つとして、今後につながる機会になることを期待したい。



4) ボランティア活動等の教育研究活動⑤

ボランティア支援センター学生スタッフ Seivior 映画上映会&ワークショップ

〈ポイントと狙い〉

○東日本大震災から15年経とうとする今、被災地の復興について改めて考える機会とする。

○気仙沼の現状や被災の状況を知ること、関係人口を増やすきっかけをつくる。

日時 2026年1月31日(土) 13:00~16:20

場所 本館大講堂

ゲスト 風間研一氏(映画「ただいま、つなかん」監督)

主催 成蹊大学ボランティア支援センター
成蹊大学ボランティア支援センター学生スタッフ Seivior

共催 日本財団ボランティアセンター

参加者 48名
本学関係者14名(学生10名、職員4名)
一般34名(他大学生10名、武蔵野市民10名、その他14名)



学生スタッフ Seivior 主催の映画上映会開催は、日本財団ボランティアセンター主催の気仙沼宿泊プログラムに参加した学生1名が、翌年に本センターの社会活動支援奨学金を活用して他のメンバー2名とともに再訪したことがきっかけである。東日本大震災からの復興まちづくりをきっかけに生まれた、現地のNPO(一般社団法人まるオフィス)からオンラインで話を聞き、自分たちがすぐに力になれると感じた「小学生が放課後に体を使って遊べていない」という課題に取り組むため、放課後支援活動に参加した。また、東日本大震災津波伝承館や奇跡の一本松などの震災遺構を見学し、移動手段や人材不足、被災・復興状況の発信不足といった課題も改めて実感した。

こうした経験を踏まえ、気仙沼の民俗を舞台にした映画「ただいま、つなかん」の上映イベントを開催した。上映後は、全員からの感想や監督への質問、加えて、現在

の気仙沼の状況や、参加者が東北・気仙沼とどう関わりたいかという意見もアンケートで集め、参加者が自分事として考えられるように工夫した。また、気仙沼を身近に感じ、支援のきっかけとなるよう、地元の銘菓や監督おすすめのアンカーコーヒーも提供した。あわせて、東北にゆかりのある品が吉祥寺の東北物産館で購入できることも紹介した。

自身にできる支援としては、「まず知ること」「忘れないこと」「伝えること」「実際に行くこと」「気仙沼の商品購入」「募金」が挙げられ、提供した銘菓やコーヒーも大変好評だった。風間監督のお話や、学生・参加者双方の声を聞けるワークショップの構成も高く評価され、「素晴らしいイベントだった」という感想が寄せられた。一方、常に課題となっている成蹊生への広報方法や実施時期については改めて検討し、今後の企画に活かしていくことを期待したい。

4) ボランティア活動等の教育研究活動ー⑥

学生の挑戦と共創の場 社会貢献活動×学生プロジェクト活動 成果報告会 2025

〈ポイントと狙い〉

○本学学生の自主的な活動に対する活動資金などの支援を提供している社会活動支援奨学金制度、蹊プロジェクトを行っている。昨年度に続き、両事業の成果報告会を開催した。

○ボランティア支援センターがテーマ事業として取り組む「学生×地域社会課題プロジェクト」の活動に携わった学生からの報告も併せて行った。

日 時 2026年3月23日(月) 14:00～16:00

場 所 大学11号館ラーニングコモンズストーリーウム3階イベントエリア

参加者 66名(本学学生・教職員、一般)

主 催 ボランティア支援センター
ラーニングコモンズ運営委員会

内 容 第1部 学生×社会貢献活動
ボランティア支援センター
社会活動支援奨学金による報告、
学生×地域社会課題プロジェクト活動報告
(1) 体育会水泳部水球班
(2) 文化会美術部
(3) 学生ボランティア本部Uni.復興支援プロジェクト
(4) はなおもい
(5) ボラセンプロジェクト チーム2025
第2部 学生×プロジェクト活動
ラーニングコモンズ運営委員会 蹊プロジェクト活動報告
(1) クリスの成蹊パンちゃんじ
(2) TED×SEIKEI U ～地域と成蹊大学の融合
(3) SEIKEI PEACH PROJECT
(4) ミミズで世界に彩を！サステナ堆肥プロジェクト
(5) 成蹊大学教授図鑑



ラーニングコモンズ運営委員会(主管部署: 高等教育開発・支援センター)と共催した成果報告会は今年度で2回目を迎えた。森 雄一学長による開会挨拶から始まり、2部構成により、活動の成果や、これからの活動に向けての課題や展望について報告を行った。本番前の練習及びスライドの内容調整、当日のリハーサルと練習を重ねるごとに発表内容が洗練され、堂々とした態度で臨むことができた。第2部終了後には、境 広志ボランティア支援センター所長、遠藤 誠治ラーニングコモンズ長より総評をいただき、

学生の奮闘を称え、これからの発展を期待する言葉をいただいた。

閉会後は懇親会を行い、学生や参加者が親睦を深めた。ここでは、学生の活動場所(石川県能登地方、愛知県田原市周辺)にちなんだお菓子や飲み物が並べられ、和やかな雰囲気ですべてを終えることができた。

第2部の蹊プロジェクトは、学外の団体や会社等と連携した活動を対象としているが、互いに発表を聞き、大いに刺激を受けた様子であった。

5) ボランティア活動等の広報及び情報発信①

学生へのボランティア情報発信強化に向けたサイネージ設置

ポイントと狙い

- 募集情報や活動紹介をタイムリーに発信し、活動への興味と参加のきっかけを増やす。
- 紙媒体・Webに続く新たな情報発信チャネルとして、認知度向上と参加促進を目指す。

放映期間

平日：9：00～17：00（夏期・冬期・春期休業期間を除く）

内 容

本館1階学生ラウンジにサイネージを設置し、学生が日常的にボランティア情報へアクセスできる環境を整備した。サイネージでは募集情報やイベント案内などを継続的に配信し、学生がより情報を受け取りやすいよう工夫している。これにより、学生の興味喚起や参加促進につながる新たな情報発信拠点として運用を開始したところである。



本センターでは、学生へのボランティア活動の普及啓発および参加促進に向け、情報発信手段の拡充を継続して進めてきた。これまで掲示板やポータルサイト、SNS等を活用して情報提供を行ってきたが、「学生が日常的に立ち寄る場所で、視覚的に分かりやすい形で情報に触れられる環境を整えたい」という課題があった。

こうした背景を踏まえ、2025年度は新たな取り組みとして、本館1階学生ラウンジにサイネージを設置した。同ラウンジは学生が打ち合わせや休憩等に利用するスペースであり、日常的に学生の目に触れやすいこと、また本センターに近接していることから、情報発信拠点として適していると判断した。サイネージは原則として大学の休業期間を除く平日9：00から17：00に稼働し、ボランティア募集情報やイベント告知、本センターの紹介等を随時更新して配信している。

サイネージでは、写真や動画など視覚的

な要素を取り入れ、学生が立ち止まって見やすいコンテンツを提供している。また、応募ページへのアクセスを容易にするため、各情報にQRコードを付し、関心を持った学生がその場で詳細を確認したり、参加申し込みフォームへアクセスしたりできるようにしている。

設置後は、配信を見て本センターを訪れる学生の姿が見られるようになり、ボランティア活動に触れる機会が着実に拡大している。

今後は、イベント実施報告や、本センターに関わる学生のインタビュー、活動紹介の動画コンテンツの配信に加え、外部団体との連携情報の掲載等も検討し、より魅力的で効果的な情報提供の充実を図る予定である。サイネージが、学生にとってボランティア活動をより身近に感じられるきっかけとなり、参加促進につながることを期待している。

第 2 部

学生によるボランティア活動報告

第 2 部は、ボランティア活動に関わる学生の活動として、以下の団体の報告を行う。

1 ボラセンプロジェクト チーム 2025

テーマ事業「学生×地域社会課題プロジェクト」のために結成した学生チームであり、2024 年 12 月から 2026 年 3 月まで活動した。

2 学生スタッフ Seivior

学生スタッフ Seivior は、本センターと連携・協働し、学生目線を生かした活動をしている。

3 学生ボランティア団体サポート制度登録団体

本制度は、本学学生によるボランティア団体の活動を推進する制度であり、2025 年度は以下の 4 団体が活動した。

- (1) 成蹊大学学生ボランティア本部 Uni.
- (2) RootSeikei
- (3) お芋掘りサークル
- (4) NoSide (ユニバーサルスポーツボランティア)

1 ボラセンプロジェクト チーム 2025 2024 年 12 月から活動開始

団体概要	代表	TL 笹井優希
	消防チーム	笹井優希・小泉陽花・鈴木杏
	非常食チーム	TL 荒井聡太、内山千星、中西陽琉 サポートスタッフ 湯川大晋
	謎解きチーム	TL 吉盛文菜、井倉玲奈、廣瀬純白
	広報チーム	TL 小泉陽花、鈴木杏

(ボラセンプロジェクト チーム 2025 とは)

2025 年度のテーマ事業「学生×地域社会課題プロジェクト」では、武蔵野市の地域社会課題の解決に向けて取り組む学生を公募しました。前年度後期からプロジェクトはスタートし、学生が地域の課題を学び、学生自身と地域市民の両者にとって重要だと考えた「防災」をテーマに選定しました。学生自身が関係各所に出向くなど主体的に活動し、「SEIKEI 防災フェス 学生と考える“もしも”のチカラ」と題して、学内外の多くの方に防災啓発イベントを実施しました。

2025 年度の活動

(総括) 代表 笹井優希

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

主な活動内容は、本学学生や教職員に対して防災に関する知識、また考える機会を提供するイベントの開催です。事前学習の中で防災への関心は高いものの、自分事として考えて備えることができていないという部分に課題意識を持ち、「体験型プログラムを通じて楽しく防災知識を身につける機会を提供する」を活動テーマに掲げ、イベントの企画・実行を行いました。災害発生時には地域との共助も不可欠であることから、同じキャンパスに通う成蹊小・中・高校生や保護者、地域住民にも参加を呼びかけました。本プロジェクトでは学年や学部が違うメンバーで 1 年を通じて活動することから、メンバー間での交流や目標共有を重視し、機動的に動けるようにチーム単位で企画立案や外部訪問を行いました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

活動を通じて、防災について日常的に情報をアップデートさせることの重要性を実感しました。今回のプロジェクトに参加するまで、防災というのは有事に備えて非常食などの備蓄をする程度のものであり、個人として準備ができる範囲は限られていると思っていました。しかし、活動の一環として地域の消防署や市役所を訪問し、やり取りを重ねる中で、個人や家庭で行うことができる備えは以前と比べて遥かに多くなっていることに気づきました。例えば、100 円ショップで防災グッズが手軽に揃えられるようになりましたし、それらを利用して、外出中の被災に備えた防災グッズをボトル型の容器にまとめたものを防災ボトルとして持ち歩くことで簡単に防災力を高めることができます。

また、池袋防災館をメンバー皆で訪問し、地震の揺れや火災の煙からの避難などを体験したことで、災害発生時を具体的に想像することができ、防災を自分事として捉えられるようになりました。より多くの人にこうした意識のアップデートをしてもらいたいと考え、体験型イベントにこだわりました。

防災グッズの進化や行政の取り組みの広がりから個人ができる災害に対する備えは多様化しています。自然災害と隣り合わせで生きていくことが強いられる我々は、日常的に防災に対する情報にアンテナを向け、“もしも”に備えて情報を更新していく必要があると考えようになりました。

① 消防チーム（文責：TL 笹井優希）

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

主な活動内容は、イベントの企画プログラムである救命講習、消防展示、初期消火訓練の実施準備及び当日の運営です。全体の活動テーマを踏まえて、「防災について考えるきっかけを楽しく参加者に提供する」を消防チームのテーマに設定し、近年我が国において深刻な社会リスクとなっている自然災害に対する適切な対処方法を来場者に知ってもらう機会になることを目指しました。大学生に加え、成蹊学園の児童・生徒といった若い世代の来場を想定していたため、実際に取り組みながら学ぶことができる体験プログラムを重点的に取り入れました。また、わかりやすく楽しみながら防災知識を学ぶことができるような展示を目指し、イラストやグラフを活用して準備しました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

今回の活動を通じて得られた学びは成蹊大学や武蔵野市が実施している防災に関する取り組みへの知見を深めることができた点です。大学や行政が防災の取り組みを行なっていることは認識していましたが、具体的な取り組みについては理解できていませんでした。しかし、今回の活動で成蹊大学が学生用の食品 3 日分（9 食分）・ 4,950 名分（被災時の帰宅困難者を想定し、在籍学生数の半分より少し多い程度）や防寒具等を保管している地下倉庫や屋外のその他の備蓄品保管場所を見学させていただきました。また、武蔵野市がセブン・イレブンと協力し各店舗に AED を配置しているといったことを知ることができました。

情報発信をしてイベントに集客することの難しさも実感しました。今回の一連の活動において武蔵野消防署や武蔵野市役所の方とお話をした際に、両者共通して、広報活動を通じて情報を届けることの大変さを言及されていました。私達自身が事前にイベントを広報する際や当日に呼び込みを行なった際、特定の年齢層に限らず、参加に前向きな方は多くなく、大変苦勞しました。参加者を幅広く集めるためには、参加への敷居が低く、魅力的なプログラムを多角的な視点から企画することが大前提としてあり、さらにそのターゲット層にあった様々な手段を利用した広報をする必要があると実感しました。

② 非常食チーム（文責：TL 荒井聡太）

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

主な活動内容は、イベント当日のプログラムの一つである非常食の試食会にて提供する非常食の選定や非常食の歴史といった展示の作成、そして当日の試食会運営です。

試食会のテーマは「非常食に対する意識改革」とし、これまでの乾パンといった非常食に代表される「長期保存が可能で栄養補給を優先するが美味しさには欠けるもの」という固定的なイメージを払拭し、「非常食＝美味しく食べられるもの」という新しい認識を広めることを目指しました。また、美味しい非常食の存在を知ってもらい、非常食の備蓄を促すことで非常時の食生活を充実させるとともに、精神的な不安やストレスを軽減し、心の安定や安心感につなげることを期待しました。

活動において重点的に取り組んだのは、提供する非常食の選定です。イベント開催までに 3 回の選定会を実施し、メンバーと約 20 種類の非常食を試食することでイベント参加者に対してどういった非常食を提供すればいいか考えました。その際に、「美味しさ」「保存期間」「作りやすさ」の 3 つの基準を設け、来場者に最も適した非常食を選定するようにしました。また、提供方法についても保健所への訪問等を通じてメンバーで検討を重ね、衛生面やスタッフ数を考慮した結果、小中学校の給食のようなセルフサービス形式を採用しました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

この活動を通じて得られた学びは、防災、特に非常食に関する知識の向上です。企画を進めるまでは「非常食＝美味しくない」という固定的なイメージを持っていましたが、選定会を重ねる中で非常食が想像以上に進化しており、種類も豊富であることを実感しました。こうした多様な非常食を備蓄することは、被災時の食のバリエーション確保につながり、心の安定や精神的な支えとなることを改めて学びました。

また、長期にわたる企画を主体的に進めることのやりがいと難しさも経験しました。仕事の分配や会議の日程調整、モチベーションの維持など、少人数のチームであっても意識すべき点が多くありました。メンバーが割り振った仕事を着実に遂行してくれたり、想定外の事柄を考慮してくれたりするなど、メンバーの積極的な協力によって企画を進めることができました。

③ 謎解きチーム（文責：TL 吉盛文菜）

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

主な活動内容は、防災フェスにおけるゲームコーナーとクイズラリーの企画・運営です。「楽しく学ぶ防災」を活動テーマに、難しくとらえられがちな防災知識を、体験を通じて無理なく理解してもらうことを目的として企画しました。ゲームコーナーでは、時間限定で開催する企画の間を取り持つ役割を意識して、終日開催ながら短時間で体験できる防災ゲームや防災訓練 VR 体験を導入しました。また、クイズラリーは各コーナーを回ったあとの知識定着を目的に実施し、防災に関わる景品の選定からイベントの会場 MAP の作成まで、全般

に携わりました。さらに、実際にゲームを体験した学生から意見や感想を収集し、広報する機会として、ボランティアウィークで防災ゲームの体験会を実施しました。内容から説明方法まで改善を重ね、参加者の視点に立った企画づくりを追求しました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

本活動を通じて、多くの意見の中から適切なテーマや活動内容を選択するための判断力の重要性を学びました。特に企画段階においては、「やりたいこと」と「実現可能性」との間に生じる差を常に意識し、現実的な視点で検討する必要があることを強く実感しました。さらに、広報の手段や対象範囲によってイベントの盛り上がりが大きく左右されることや、入念な事前準備とチーム内での密なコミュニケーションが本番の成功に直結することを学びました。ゲーム参加者の年齢層は、その好例です。当日は大学生を主とする事前の予想に反して、小学生以下の親子連れが多く体験に参加してくれました。このことから、市報への掲載や成蹊小学校、地域施設への掲示効果を実感しました。これらの経験を通して、企画運営や情報発信そのものに対する楽しさややりがいを実感するとともに、メンバーそれぞれが防災知識を高めることができました。

④ 広報チーム（文責：TL 小泉陽花）

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

主な活動内容は、Instagram といった SNS 等の運営とポスターやコーナーに使用する印刷物の作成・配布です。活動当初は、Instagram で企画に関する投稿をする際に、デザインや完成度にこだわって作成していましたが、様々な点を考え過ぎて何を投稿してよいのかわからなくなってしまうことが多くありました。そのため、活動開始時にチームで設定した「活動に対する認知を向上させる」というテーマを思い出し、あまり投稿の完成度にこだわらずに多くの企画に関する記録や告知を SNS 上に上げるようにしました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

事前に広報活動の計画を立てていたものの、中盤で計画通りに進まなかったことをきっかけにモチベーションが下がり、投稿がほとんどできない期間が生まれてしまいました。しかし、後期に入りイベント内容が固まったことで、他のチームメンバーと情報を共有しながら計画を改めて練り直すことができました。その結果、イベント告知の投稿頻度を上げることにつながりました。この経験から、1年間を通して丁寧に計画を立てることの重要性を学ぶと同時に、すべてを計画通りに進めることは難しいので、状況に応じて柔軟に軌道修正をすることも必要があることを実感しました。

また、一つ一つの投稿内容にこだわり過ぎず、「多くの人の目に触れる機会を増やす」という視点を意識したことで、イベント直前には計画通りのペースで投稿できるようになりました。広報の特性上、アカウント開設初期や、イベントが近づいた時期には、継続して多くの投稿を行うことが不可欠であることも学びました。

2 学生スタッフ Seivior 2020 年 4 月設立

団体概要 代表：上村祐葵

所属人数 16 名（2025 年 12 月末現在）

（学生スタッフ Seivior とは）

学生スタッフ Seivior は、センターと連携・協働しながら、学生支援に関する事業内容（計画）や課題を共有し、学生の立場を活かした活動を通して、本学学生へのボランティアの普及・啓発を行います。

2025 年度の活動

（総括）代表 上村祐葵

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

活動テーマは「ボランティアに関心が低い学生や活動に踏み出せない学生の参画」です。学生スタッフ自らが研修に参加したり、イベントの企画・運営を行ったりすることで、学生目線で成蹊大学生に向けたボランティア活動の普及・啓発を目指して活動しています。

今年度は、「センターでの活動をより多くの学生に知ってもらうこと」、「ボランティアにより気軽に参加してもらうこと」を目的とした企画の実施と、ボランティア支援センターに気軽に足を運んでもらうための広報活動に重点的に取り組みました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

今年度は新しい試みとして、センターの活用頻度を高める仕組みを検討する「内部充実チーム」と、広報活動を中心に行う「外部発信チーム」に分かれて活動を開始しました。

内部充実チームでは、メンバー同士で積極的にアイデアを出し合うなど、活動当初は順調に進んでいました。しかし、センターとの認識の違いを十分にすり合わせる事ができず、チームとしてうまく機能させることができませんでした。また、情報共有が不十分であったことからメンバー間でも認識のずれが生じ、結果として年度途中でチームとしての活動を休止することとなりました。

この経験を通して、立場による視点の違いをお互いに理解したうえで、より丁寧なコミュニケーションを心掛け、目的や課題を明確にしていくことの重要性を学びました。

今年度は、センターのサポートを受けながら、学生主体で 3 つのイベントを企画・実施しました。

1 つめの「ミッション：クリーン ポッシブル」では、楽しみながらゴミ拾いを行うという目標を達成することができました。ゲーム要素を取り入れたことで、ゴミを探す視点や分別の意識が自然と身につきました。また、振り返りを行うことで、ゴミが多い場所を整理することができました。活動中、地域の方から「ご苦労様」と声をかけていただく場面

もあり、ボランティアのやりがいと意義を感じることができました。

2 つめの「社会問題解決へのアプローチ こども・家庭の貧困問題と私たちにできること」では、大学の講義での学びを活かした体験ワークを通じて、こどもの貧困問題への理解を深めることができました。当日は、他大学の学生や地域住民の方にもご参加いただき、意識変容を促す機会になったとの感想が多く寄せられました。

3 つめの「『ただいま、つなかん』映画上映会&監督と話せるワークショップ」では、イベント開催の 2026 年 1 月に向けて、前年 9 月から準備を始めました。ミーティングでは、メンバー間で課題や進捗状況を共有しながら、丁寧に話し合いを重ねました。余裕をもったスケジュールで準備を進めることができたため、不安なく当日を迎えることができました。また、従来の SNS (Instagram・X)・ポータルサイトでの配信に加え、週刊きちじょうじ・市報むさしの・映画のホームページ・東北物産店での掲示など幅広い媒体を活用して広報を行いました。その結果、幅広い年代の方に参加いただくことができました。

3) 活動における課題、次年度以降の展望について

これまで、イベントの企画において、全体の見通しを立てられていなかったことや、情報共有が十分にできていなかったことが課題になっていました。前述の映画上映会では、この点を強く意識して改善に取り組んだことで、企画をスムーズに進めることができました。次年度は、取り組むすべての活動において、メンバー全員がこの課題を意識できるようにしたいと思います。

また、イベント当日には、参加者に積極的に声をかけて交流を図ったり、参加者同士がつながれるような働きかけを行ったりすることで、また参加したいと思ってもらえるよう努めていきたいです。

広報については、様々な方法で周知することの大切さを改めて感じました。SNS やポータルサイト、ポスター掲示に加え、知人に直接声をかけたり、広報先をさらに広げたりすることで、より多くの方の目に留まるように工夫をしていくことが必要だと感じています。

※年間を通じ行ってきた主な企画・イベントなど (3 つ)

日程	活動場所	参加人数	内容
9 月 24 日	井の頭恩賜公園	大学生 11 名	ミッション:クリーン ポッシブル (成蹊大学生を対象に、学外で行ったゴミ拾いイベント)
11 月 29 日	成蹊大学	大学生 8 名	社会問題解決へのアプローチ こども・家庭の貧困問題と私たちにできること (基調講演、家計を考えるワーク、パネルディスカッション)
2026 年 1 月 31 日	成蹊大学	大学生 10 名	「ただいま、つなかん」映画上映会&監督と話せるワークショップ 震災から 14 年 民宿つなかんの物語と今私たちにできること (映画上映会、監督を交えてのワークショップ)

3 学生ボランティア団体サポート制度登録団体

(1) 成蹊大学学生ボランティア本部 Uni. 2009 年 6 月設立

団体概要 代表：16 期 飯野奏、副代表：16 期 室越大輝、会計：16 期 松原圭佑
所属人数 733 名（2026 年 3 月末現在）
環境チーム TL：大森きらり（294 名）、教育チーム TL：杉村弘翔（80 名）、
国際チーム TL：村松優斗（25 名）、地域チーム TL：金井大翼（275 名）、
福祉チーム TL：小野寺逸人（59 名）
運営組織：企画局長：宮田唯楓、広報局長：川真田晃介、渉外局長：臼井心優、
総務局長：宮野遥

（成蹊大学学生ボランティア本部 Uni. とは）

幅広い分野のボランティア活動への参加や、ボランティア活動の企画を行っている。次の 5 つのチームで活動を行っており、チームとは別に 5 つのプロジェクト（ゆめはかせ、復興支援、vintage、ゆにぷに、Exceed walk）が通年で活動している。

- ①環境チーム：井の頭公園の定期的なごみ拾い、環境保全を考えるワークショップの実施
- ②教育チーム：地域の子どもたちとの交流、子どもたちとの関わりを考えるワークショップの実施
- ③国際チーム：ワークショップ、外国人留学生との交流、ベトナムフェス・三鷹フェスへの参加
- ④地域チーム：武蔵野市の団体と連携し、お祭りやイベントスタッフとしての参加、地域活性化の
為のイベント企画
- ⑤福祉チーム：武蔵野市周辺の福祉施設への訪問、障がい体験のイベント企画

2025 年度の活動

（総括）代表 飯野奏

1 年間を通して、すべてのチーム・プロジェクトが活発に活動を行いました。活動を通じて外部の方々との新たな関係を築くとともに、長くお世話になっている団体の皆さまと協力しながらボランティアを実施することができました。その中で、Uni. の活動は多くの人々の支えによって成り立っていることを改めて実感しました。

また、代表立候補時に掲げたマニフェストの通り、多くの新入部員を迎え入れられたことも大きな成果のひとつです。

今後の課題として、まず、チームやプロジェクトの枠を越えて参加できるボランティア活動の参加者を増やす必要があると感じています。当部では、幹部の協議により実施するボランティア活動を決定し、その内容に応じてチームやプロジェクトへ振り分け、各所属内で参加者を募ることが基本となっています。一方で、部全体に向けて参加を呼び掛ける活動も不定期に実施していますが、参加者が集まりにくいという現状があります。こうした枠を越えた活動にも参加しやすくなるよう、

環境や仕組みを整えていきたいと考えています。

次に、急激な部員増加により、Uni. は「ボランティア部」であるという大前提となる共通認識が薄れつつある点も課題です。まずは、ボランティア参加への心理的ハードルを下げ、一人でも多くの部員が気軽に参加できる環境づくりが重要だと考えています。そのうえで、ボランティアの基本的な考え方を部内で共有し、活動を通じて社会への理解や視野を広げてほしいと願っています。

さらに、広報活動にも改善の余地があります。現在は Instagram や X といった SNS を活用していますが、より多くの人に Uni. の活動を届けるためには、投稿数の増加や内容の工夫が求められます。活動の幅を広げていくためにも、広報の強化は今後の課題です。

来年度からは、ボランティア活動の決定方法を変更します。これまでは、地域や関係団体から寄せられた依頼の中から選択することが主流でしたが、今後は自分たちから積極的に取り組みたい活動を探して応募する方式も取り入れていきます。「成蹊大学の Uni.」をより多くの人に認知していただき、学内最大のボランティア団体としての強みを活かした活動を展開していきたいと考えています。また、部内での交流をさらに活発にし、OB・OG とのつながりを強化することで、Uni. がより一層盛り上がっていくことを期待しています。

① 環境チーム（文責：TL 大森きらり）

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り込んだことなど

主な活動内容は、武蔵野市内の定期清掃や環境美化活動です。本チームは所属人数が多く、かつ定期的な活動が最も充実していることが大きな特徴です。このような強みを生かし、「多くの人と環境に触れて活動を盛り上げよう」というテーマのもとで活動してきました。

活動頻度が高い分、コアメンバーに負担が集中しないよう、より多くのメンバーが気軽に参加できる環境づくりを目指しました。そのため、環境保全活動にとどまらず、ボランティアを「人との繋がりを深める交流の機会」として捉え、活動企画を立案しました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

海ボラとフェスボラへの参加を通じて、環境問題に主体的に取り組む姿勢の重要性を実感しました。海ボラでは鎌倉の由比ヶ浜海岸でゴミ拾いを行いました。が、破碎したプラスチックゴミが多く、海洋汚染やマイクロプラスチック問題を身近に感じました。また、音楽フェスや食フェスなどでは、ゴミステーションに立ち、来場者に分別を呼びかけました。大量生産・大量消費が進む現代を象徴するような膨大な廃棄物の量に驚かされ、環境に寄り添った社会の実現にはまだ課題が多いことを痛感しました。一方で、私たち一人ひとりが少し意識するだけで環境負荷を軽減できることも学びました。参加したメンバーの多くが「環境に対する意識が変わった」と話しており、持続可能な社会の実現に向け、取り組むべきことが多くあると気付くきっかけとなりました。

3) 活動における課題、次年度以降の展望について

課題として、所属メンバー全体の意識が十分に高いとは言いがたいことが挙げられます。本チーム

は 300 名以上が所属しているものの、実際に活動に参加するメンバーは限られています。大きなイベントでは約 5 割が参加する一方、定期的な活動への参加者は 2 割にも満たない状況でした。また、一度参加したメンバーに継続して参加してもらう工夫も必要です。

継続的に参加しているメンバーは環境への意識が高まっている傾向が見られるため、このような積極的なメンバーを増やすことが重要です。そこで次年度は、①「参加したい」と思ってもらえる魅力的な企画づくり、②環境問題を自分事として考え、意識改革につながるプログラムの実施、といったことに力を入れて取り組む予定です。

年間を通じ行ってきた主な企画・イベントなど(3つ) ※参加人数は Uni. 所属の学生の人数

日程	活動場所	参加人数	内容
6 月 1 日	成蹊大学周辺	150 名	地域清掃・部員間交流
8 月 6 日	由比ヶ浜海岸	120 名	海岸清掃・部員間交流
9 月 27 日	北区花火大会	75 名	来場者への分別呼びかけ、ゴミの分別・運搬、各ゴミ捨てブース付近のピースキーパー活動

② 教育チーム（文責：TL 杉村 弘翔）

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだこと

本チームでは、「ボランティア活動を通じて地域の子どもたちと継続的に関わり、地域活動の活性化に寄与すること」をテーマに活動しました。

単にボランティアに参加するだけでなく、主催者の方々と連携し、学生が企画・運営の中心を担う形でイベントに関わるなど、「ボランティアとして地域とどのように関わるべきか」を考えながら取り組みました。

また、地域の子どもや住民の方々と幅広く交流できる機会を創出することを意識し、企画づくりを進めました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

本年度は、子どもたち一人ひとりの年齢や性格に応じた関わり方を意識しながら活動を行いました。初対面の子どもと接する場面も多く、どのような声かけや接し方が適切か、学生同士で試行錯誤を重ねました。その結果、相手の立場に立って考える姿勢を養うことができました。

また、企画の準備や当日の運営を学生主体で進めたことで、活動に対する責任感が高まり、ボランティアの捉え方が「参加するもの」から「自ら関わり、支えるもの」へと変化しました。こうした経験を通じて、地域と継続的に関わることの意義を実感することができました。

3) 活動における課題、次年度以降の展望について

一方で、活動内容が交流や遊びに偏りがちであった点は課題として挙げられます。子どもたちに楽しい時間を提供するだけでなく、学びや気づきにつながる要素を取り入れた企画について、十分

第I章 活動報告

に検討ができませんでした。

次年度は、季節行事や従来の交流型イベントに加え、子どもたちと一緒に考えたり学んだりできる内容を盛り込んだ企画に取り組みたいと考えています。また、これまで継続してきた地域でのボランティアについても、関係者との連携を大切にしながら、安定的に継続していきたいと考えています。

年間を通じ行ってきた主な企画・イベントなど（4つ）※参加人数はUni. 所属の学生の人数

日程	活動場所	参加人数	内容
5月24日	成蹊大学	60名	部員間交流を目的としたワークショップを実施した。
8月11日	南町コミュニティセンター	25名	夏祭りに参加し、制作活動等を通じて子どもたちとの交流を行った。
8月18日	南町コミュニティセンター	25名	夏休みの宿題サポートを実施し、子どもたちとの交流を行った。
11月16日	成蹊大学	70名	部員間交流を中心としたワークショップを実施した。

③ 国際チーム(文責:TL 村松優斗)

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだこと

今年のテーマは「みんながまた参加したいと思えるようなチーム作り」でした。

15期の先輩方が引退し、16、17期だけで活動する上で昨年度のメンバーのボランティアやミーティングへの参加率がかなり低い状況であると感じました。そのためメンバーがやりたいと思ったことを積極的に取り入れ、「また次の活動も参加したい!」と思わせることができるようなチーム作りを目指しました。その結果、多くのメンバーが毎回の活動に参加してくれるようになり、ボランティアの楽しさを知ってもらうきっかけにもなりました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

海外フェスのボランティア活動を通じて、国籍や文化の異なる人々と協力する難しさと同時に、共通の目的があれば自然と一体感が生まれることを学びました。ベトナムフェスや三鷹国際フェスでは、来場者対応や運営補助を担当し、相手の立場に立って行動する姿勢の大切さを実感しました。また、チーム内で積極的に声を掛け合うことで、初参加のメンバーも安心して活動できる環境を作ることができました。こうした経験から、ボランティアは社会に貢献するだけでなく、人とのつながりや自分自身の成長につながる貴重な学びの場であると強く感じました。

3) 活動における課題、次年度以降の展望について

所属人数の少なさとボランティアの少なさが課題です。今年度はチームの雰囲気作りに重点を置

いたこともあり、当初目標としていたボランティアの新規獲得までは手が回らない状況でした。また 1 年生の入部時期との兼ね合いで 9 月に予定していた現地ボランティアを延期せざるを得ない状況になってしまったのも反省です。来年度は現在のチームの雰囲気を維持しつつ、新規ボランティアの数をさらに増やすことができればと思います。また新入生獲得も積極的に行いたいと考えています。2 月には延期していた現地ボランティアも実施予定なので必ず成功させたいです。

年間を通じ行ってきた主な企画・イベントなど（3 つ）※参加人数は Uni. 所属の学生の人数

日程	活動場所	参加人数	内容
5 月 31 日	代々木公園	30 名	ベトナムフェスティバルにおけるゴミの分別、ゴミ拾い。
9 月 21 日	井の頭恩賜公園	26 名	三鷹国際フェスティバルイベントの手伝い。
2 月 18 日～22 日	タイ（バンコク）	8 名	現地ボランティア

④ 地域チーム（文責：TL 金井太翼）

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

今年度の活動テーマは「ボランティア活動や地域の方々との交流に、楽しみながら参加すること」でした。

地域のお祭りのお手伝いなどを通じて、子どもを含む地域住民の方々と多く関わりました。またお祭りの運営にスタッフとして参加するだけでなく、自分たちで出店を企画・実施するなど、主体的な活動にも取り組みました。さらに、ボランティア活動だけにとどまらず、地域の方々との交流の機会を積極的に設け、メンバーが楽しみながら参加できるよう工夫を行いました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

多くのメンバーが参加した本宿盆踊り祭りでは、当初屋外での開催予定でしたが、天候の都合で急遽屋内開催へと変更されました。そのような状況でも、出店を担当していたメンバーが臨機応変に子どもたちを室内に呼び込む工夫を行い、結果として大盛況となりました。一人ひとりが責任感をもって主体的に役割を全うしたことが、イベント全体の成功につながったと実感できる貴重な経験となりました。

3) 活動における課題、次年度以降の展望について

課題として、メンバーのボランティアに対する意識が、全体的にはまだ高いとは言えない点が挙げられます。年度はじめのミーティングやボランティア活動には多くの参加があったものの、継続的な参加にはつながらないケースが見られ、次第に参加メンバーが固定化していきました。

次年度は、年度はじめに実施するボランティアの数を増やし、初期段階からボランティアへの意識向上を図りたいと考えています。加えて、メンバーが参加しやすい地域交流を中心とした活動を

第 I 章 活動報告

定期的に開催したり、参加のハードルを下げるためのアイデアをメンバーから広く募ったりする取り組みも必要であると感じています。

年間を通じ行ってきた主な企画・イベントなど（3つ）※参加人数はUni. 所属の学生の人数

日程	活動場所	参加人数	内容
8 月 10 日	武蔵野市立第三中学校	約 120 人	本宿地区盆踊り祭りにおいて模擬店を出店して地域の方と交流した。
9 月 13 日～14 日	吉祥寺駅周辺	約 20 人	吉祥寺秋祭りのお手伝い。
10 月 26 日	吉祥寺駅周辺	約 20 人	吉祥寺ハロウィンフェスタ 2025 のお手伝い。

⑤ 福祉チーム（文責：TL 小野寺逸人）

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

今年度は「コミュニケーション」をテーマに、高齢者や障害のある方と関わるボランティア活動を行いました。活動内容は多岐にわたりますが、対話を通じて相互理解を深めることを大切にしてきました。

また、今年度はメンバーが大幅に増えたことから、コミュニティづくりに重点的に取り組みました。食事会などの親睦の機会を増やしたほか、メンバーへのアンケートを実施してチームに求めるものを把握し、それを活動に反映させることで参加率の維持にも努めました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

高齢者や障害のある方と関わることを、必要以上に重く考えていたと気づくことができました。チームに入った当初は、ボランティアで関わる人たちを「助けたい」という想いで活動していました。しかし、リーダーとして多くの活動に参加する中で、「話すのが楽しかった」と言ってもらえることが増え、求められているのは必ずしも「支援」ではなく「コミュニケーション」であると実感しました。この気づきをチームメンバーに共有することで、ボランティア活動への心理的ハードルを下げ、より参加しやすい雰囲気づくりにつなげていきたいと考えています。

3) 活動における課題、次年度以降の展望について

課題として、所属人数の増加に伴う帰属意識の低下が挙げられます。今年度は30名の新入生が入部し、チームの規模が大幅に拡大しました。そのため、メンバー間の交流を目的とした機会を十分に設けることが難しくなり、特に1年生にとっては参加のハードルが高くなってしまったという状況が生じました。

次年度は、新入生を勧誘する際に、チームとしての活動内容を丁寧に伝え、活動意欲の高いメンバーを迎え入れることを重視したいと考えています。また、チーム内に係を設けるなど、メンバーが責任感をもって活動に取り組める仕組みづくりも必要であると感じています。

年間を通じ行ってきた主な企画・イベントなど（3つ）※参加人数はUni. 所属の学生の人数

日程	活動場所	参加人数	内容
10 月 18 日	武蔵野エコ re ゾート	40 名	武蔵野市の大規模な活動であるあったか祭りの運営手伝いと出店を行う
2 月 11 日	吉祥寺 SOMPO ケアデイサービス	4 名	高齢者と一緒に身体や頭の体操を行う
3 月 9 日	吉祥寺西コミュニティセンター	4 名	地域で行われているスマホカフェに参加し、高齢者からスマホの使い方の相談を受ける

(2) RootSeikei 2019 年 11 月設立

団体概要 代表名：杉澤由希菜、副代表：山崎颯斗、柳瀬広太郎

所属人数 109 名（2025 年 12 月末現在）

（RootSeikei とは）

国際 NGO 団体 Habitat for Humanity（以下、ハビタット）に所属し、地域に根ざした活動から海外での住居支援活動まで、幅広いボランティア活動に取り組む団体です。隔週で実施している定例ミーティングでは、レクリエーションやボランティアに関するコンテンツを通して、楽しみながら意見交換を行い、知見を深めています。また、長期休暇中に行うボランティア活動の計画や報告を行っています。

継続的な活動としては、武蔵野市内で子ども食堂やフードパントリー、学習支援を行っています。さらに、長期休暇中には地方での援農や村おこし、海外での建築ボランティアなどにも取り組んでいます。「やりたいを実現できる場所」をモットーに、メンバーがそれぞれの興味・関心に合わせて活動を選べるのが特徴で、視野を広げながら学びを得られる環境です。

2025 年度の活動

（総括）代表 杉澤由希菜

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

今年度は国内での活動にとどまらず、2 年ぶりに海外ボランティアにも参加しました。

春には、武蔵野市内での子ども食堂、フードパントリー等の活動に加え、広島と新潟の 2 チームに分かれ、農業ボランティアや地域行事に参加しました。

夏は、各自の興味・関心を基にチームを編成し、各チームが多様なボランティア活動を企画・実施しました。国内の活動としては、こども食堂やフードパントリー、学習支援、長野・秋田での農業ボランティアを行いました。国外では、ハビタットの活動としてインドネシアでの建築ボランティアに参加しました。

また、ハビタット成蹊支部として、他大学の代表者・担当者と連携し、定期的に交流・意見交換の機会を持ちました。全国の仲間との交流は、メンバーの視野を広げ、ボランティア意識の向上につながりました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

多様なボランティア活動を通して、普段の大学生活では関わる機会の少ない様々な人々との交流が生まれ、これまで意識していなかった社会課題と向き合う経験が得られました。常に社会課題に目を向けることを大切にしていますが、「考えるだけでは何も変わらない」ということも学びました。支援の必要な現場に自ら足を運び、相手の立場に立って考え、

自分にできる行動を主体的に実践する姿勢が身についたと感じています。

学生だけでは解決が難しい貧困や環境問題といった社会課題に加えて、活動先の安全面が参加のハードルとなる場合もあります。しかし、学生のうちに現場を訪れ当事者意識を持ち、適切なアプローチについて議論することの重要性を強く実感しました。

3) 活動における課題、次年度以降の展望について

これまでは国内活動が中心でしたが、今年度の海外ボランティアへの参加をきっかけに、今後は国内外を問わず多様な活動へと幅を広げていきたいと考えています。一方で、メンバーが希望するボランティア活動に対し、十分な資金を確保できないことが大きな課題です。国際 NGO 団体に所属していることに加え、国際社会に興味のあるメンバーが多数いるため、継続的な海外ボランティアへの参加を目指していますが、資金面での壁に直面しています。メンバーがより自由に関心のある活動に取り組めるよう、仕組みづくりが求められています。

また、春休み・夏休みといった長期休暇中の活動が、単発になりがちな点も課題です。幹部を中心に外部団体とのつながりを維持し、組織全体で引き継ぎを行うことで、継続的な活動につなげていきたいと考えています。一度できたご縁を大切に、責任感をもって、自己満足に終わらない活動を目指していきます。

年間を通じ行ってきた主な企画・イベントなど（3つ）

※参加人数は RootSeikei 所属の学生の人数

日程	活動場所	参加人数	内容
5 月 25 日	吉祥寺北コミュニティセンター	80 名	春ボランティア各チームの報告会&新入生歓迎会
8 月 17 日～29 日	インドネシア	6 名	海外建築ボランティア
10 月 11 日～12 日	井の頭コミュニティセンター	23 名	地域のお祭りボランティア

(3) お芋掘りサークル 2023 年 4 月設立

団体概要 代表：羽鳥純平、副代表：矢島優太、古知美緒香、会計：櫻井豪、
広報：比嘉姫花、企画：澁谷健太、津田智子、田島日向汰
所属人数 78 名（2025 年 12 月末現在）

（お芋掘りサークルとは）

関東近郊での援農ボランティアを中心に活動しているサークルです。加えて、月 1 回のお料理会や学内の畑での農作物の栽培、ミミズコンポストを使った堆肥作りなども行い、農と食に関する理解を深めるとともに「育てる」、「食べる」、「還元する」というサステナブルな活動を目指しています。

2025 年度の活動

（総括）代表 羽鳥純平

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

ボランティア支援センターの紹介により①飯島農園（千葉県船橋市）、②こびと農園（武蔵野市）、③わくわく都民農園（小金井市）でのボランティア活動を開始しました。①②は月 1 回ほど、③は毎週金曜日に伺いました。また、ミミズコンポストでご協力いただいている「株式会社すみみずや」（長野県飯綱町）のもとで 1 泊 2 日のボランティア合宿も実施しました。

昨年より成蹊小学校からお借りしている学園内の畑では、さつまいも作りを行いました。5 月に苗を 250 本植え、樺祭前には教職員の方にもご参加いただき「お芋掘り会」を開催し、のべ 67 名が参加し、収穫量は約 200kg にものぼりました。収穫したさつまいもは大学芋にして樺祭で販売し、2 日間で 889 食を売り上げました。また、一部は武蔵野市内の地域食堂に寄付することができました。

さらに、ラーニングコモンズ運営委員会主催の「蹊プロジェクト」にサークルメンバーで構成されたチームで参加し、ミミズコンポストを活用して生ごみを堆肥にすることで、環境負荷を抑えた資源循環の実現に取り組んでいます。成蹊大学第一食堂をはじめ、武蔵野市内のスターバックス コーヒーやゴンチャとの連携も進み、地域との協働の幅が広がりました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

成果としては、以下の 3 点が挙げられます。

1 点目は、ボランティア受け入れ先が増え、地域との関わりが深まったことです。当初は受け入れ先が少ない中でのスタートでしたが、ボランティア支援センターの紹介により 3 か所での定期的なボランティア活動ができるようになりました。それにより地域の農家さんや農園の方々との交流が増え、充実したボランティア活動を行うことができました。

2 点目は、学内の畑でのさつまいも栽培を成功させたことです。年度初めから本格的に畑

作業を始め、5月の「苗植え week」から夏季休業中の畑管理を経て、11月に「お芋掘り会」を実施しました。サークルとしては創設以来初めての大規模な活動でしたが、無事に終えることができました。

3点目は、堆肥の生産システムが軌道に乗ったことです。「蹊プロジェクト」では今年度も審査を通過し、生ごみの分解量の向上を目指しました。生ごみの供給元として、新たに成蹊大学第一食堂やゴンチャが加わりましたが、既製のコンポストに加え120Lの大容量コンポストを作成して導入したことで処理能力が向上しました。また、ミミズが分解を苦手とする生ごみに対しては、米ぬかを用いた「ぼかし発酵」に挑戦し、これまで処理できなかった生ごみの分解方法を開拓しました。

学びとして挙げられるのは、援農ボランティアが私たちの活動の基盤であるという点です。農作業のお手伝いを通して農家さんや農園の方々と直接関わる中で、農や食に関する知識が深まり、その学びを自分たちの活動に生かすことができました。また、現場での経験を重ねるうちに、農業だけでなくサークル運営そのものにおいても、持続可能な仕組みづくりが大切だと実感しました。

3) 活動における課題、次年度以降の展望について

現在の課題は2点あります。

1点目は、参加率の向上です。昨年度の反省を生かし、今年度は楽しめるコンテンツ(新歓食事会、新歓BBQなど)を多く用意し、まずは親交を深めることを意識しました。その結果、部員数自体は増えたものの、農業やボランティア活動に興味をもって参加してくれる人は思ったより少なく、参加率の向上にはつながりませんでした。今後は、サークルの活動内容をより丁寧に伝え、参加につながる仕組みづくりが必要であると感じています。

2点目は、幹部体制の不十分さです。代表・副代表に加えて、今年度より会計、広報、企画の役職を設けましたが、役割分担が十分に機能せず、とくに企画が思うように動けない状況が続きました。また、次期幹部の候補も十分にそろっておらず、まずはサークルとしての基盤をしっかり固めることに注力すべきであったと反省しています。サークルとしての規模が大きくなっている今こそ、農作業やコンポスト技術などのハード面だけでなく、組織づくりや運営体制といったソフト面の整備が求められます。次年度の幹部には、これらの基盤強化を期待しています。

年間を通じ行ってきた主な企画・イベントなど(3つ)

※参加人数はお芋掘りサークル所属の学生の人数

日程	活動場所	参加人数	内容
通年	学内の畑	47名	学園内の畑でのさつまいもの栽培、収穫、堆肥作り
5月～12月	武蔵野市、小金井市、千葉県船橋市、長野県飯綱町	26名	援農ボランティア、ボランティア合宿
11月23日～24日	成蹊大学	37名	櫛祭出店

(4) NoSide (ユニバーサルスポーツボランティア)

2019年4月設立 (旧成蹊ボッチャ部)

団体概要 代表：月森陽紀

所属人数 45名 (2025年12月末現在)

(NoSide とは)

ユニバーサルスポーツを通して地域の方々との交流を図り、障害の有無に関わらず誰もが同じ立場で楽しめる環境づくりを目的として活動しています。「誰でも楽しむことができる」をテーマに、ボッチャを中心としたユニバーサルスポーツの普及啓発を行っています。単なる「支援する側」ではなく、「同じ参加者として関わる」ことを重視し、体験会・地域イベント参加・学内企画などを通して、対等な関係性の構築を目指しています。

2025年度の活動

(総括) 代表 月森陽紀

1) 主な活動内容、活動テーマ、重点的に取り組んだことなど

2025年度は、「活動の定着と外部連携の強化」をテーマに取り組みました。昨年度はメンバー募集や組織基盤づくりに注力しましたが、今年度は以下の点を重点項目としました。

- ・定期練習日の設定による活動の定着
- ・外部団体との継続的な関係構築
- ・学内認知度の向上

特に、ボッチャの定期活動化を図り、「まず自分たちがプレイヤーとして楽しむ」ことを大切にしました。また、武蔵野市や地域団体との交流を意識し、地域連携型ボランティアへの参加回数を増やしました。

2) 活動を通じて得られた成果・学びについて

今年度の最も大きな成果は、継続的な活動を可能にする組織基盤の構築が進んだことです。昨年度は単発企画が中心でしたが、今年度は定期的に参加するメンバーが安定し、企画を主体的に考えられる体制が整いました。また、活動を通して学んだことは、「支援する／される」という構図ではなく、同じ競技者として関わる重要性です。実際に一緒にプレーすることで自然なコミュニケーションが生まれ、障害の有無を意識しない関係性が築かれることを実感しました。さらに、イベント運営では、「企画立案→広報→当日運営→振り返り」のサイクルを回す力が向上し、組織としての実行力も高まりました。

3) 活動における課題、次年度以降の展望について

課題として、

- ・企画・イベントによる参加率のばらつき
- ・企画を担うメンバーの固定化

が挙げられます。

これらを踏まえ、次年度は以下 3 つに重点的に取り組みます。

- ① 新入生の早期巻き込み
- ② リーダー層の育成
- ③ 地域団体との共同企画の増加

特にボッチャを軸としながら、「プレイヤーとして楽しむ→学ぶ→普及する」という循環を確立し、武蔵野市を中心とした外部団体との連携をさらに強化していきたいと考えています。

年間を通じ行ってきた主な企画・イベントなど（3 つ）

※参加人数は NoSide 所属の学生の人数

日程	活動場所	参加人数	内容
5 月 30 日	大学体育館	15 名	ボッチャ交流会
6 月 22 日	武蔵台学園	10 名	ブラインドサッカー体験
7 月 7 日	葛飾ロープクライミング施設	2 名	障がい者クライミング

第Ⅱ章

活動実績

1 2025年度実績一覧

日時・期間等	活動内容	参加者 (名)
4月1日(火)・ 4月3日(木)	課外活動説明会 (学生スタッフSeivior・学生ボランティア団体サポート制度登録団体参加)	—
4月17日(木)・ 4月22日(火)	学生スタッフ募集説明会 (1) 17日 9名 (2) 22日 7名	16
4月18日(金)・ 4月21日(月)	ボランティアガイダンス&合同説明会 (学生スタッフSeivior・学生ボランティア団体サポート制度登録団体) (1) 18日 32名 (2) 21日 45名	77
4月25日(金)	社会活動支援奨学金募集開始	—
5月15日(木)・ 5月16日(金)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「学習支援ボランティア」 事前ガイダンス・事前研修会	13
5月17日(土)～ 6月20日(金)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「学習支援ボランティア」 ボランティア体験	13
5月18日(日)	はじめてボランティアプログラム「けやきまつり運営サポートボランティア」 於：けやきコミュニティセンター	10
5月19日(月)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルな社会を考える①」 事前ガイダンス	15
5月23日(金)	ボランティアカフェ～国際ボランティア編～	13
5月24日(土)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「海外教育支援ボランティア」	9
5月26日(月)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルな社会を考える①」 ユニバーサルマナー検定3級受講	43
6月6日(金)	ボランティアカフェ～子ども支援編～	6
6月11日(水)	学生ボランティア団体有志による献血呼びかけ活動 献血に関するワークショップ	12
6月12日(木)・ 6月26日(木)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルな社会を考える①」 ボランティア体験 於：北町高齢者センター	4
6月13日(金)・ 6月25日(水)・ 6月27日(金)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルな社会を考える①」 ボランティア体験 於：就労支援センターKITARU	8
6月17日(火)～ 6月18日(水)	学生ボランティア団体有志による献血呼びかけ活動 チラシ配布	13
6月19日(木)	はじめてボランティアプログラム×けやき循環プロジェクト 「プランター植栽ボランティア」	21
6月23日(月)・ 6月25日(水)・ 6月26日(木)・ 6月27日(金)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「学習支援ボランティア」 振り返り	13
6月24日(火)・ 6月26日(木)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルな社会を考える①」 ボランティア体験 於：デイセンター山びこ	3
7月1日(火)	社会活動支援奨学金7月選考 応募締切日	—
7月3日(木)・ 7月4日(金)・ 7月7日(月)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルな社会を考える①」 振り返り	15

第Ⅱ章 活動実績

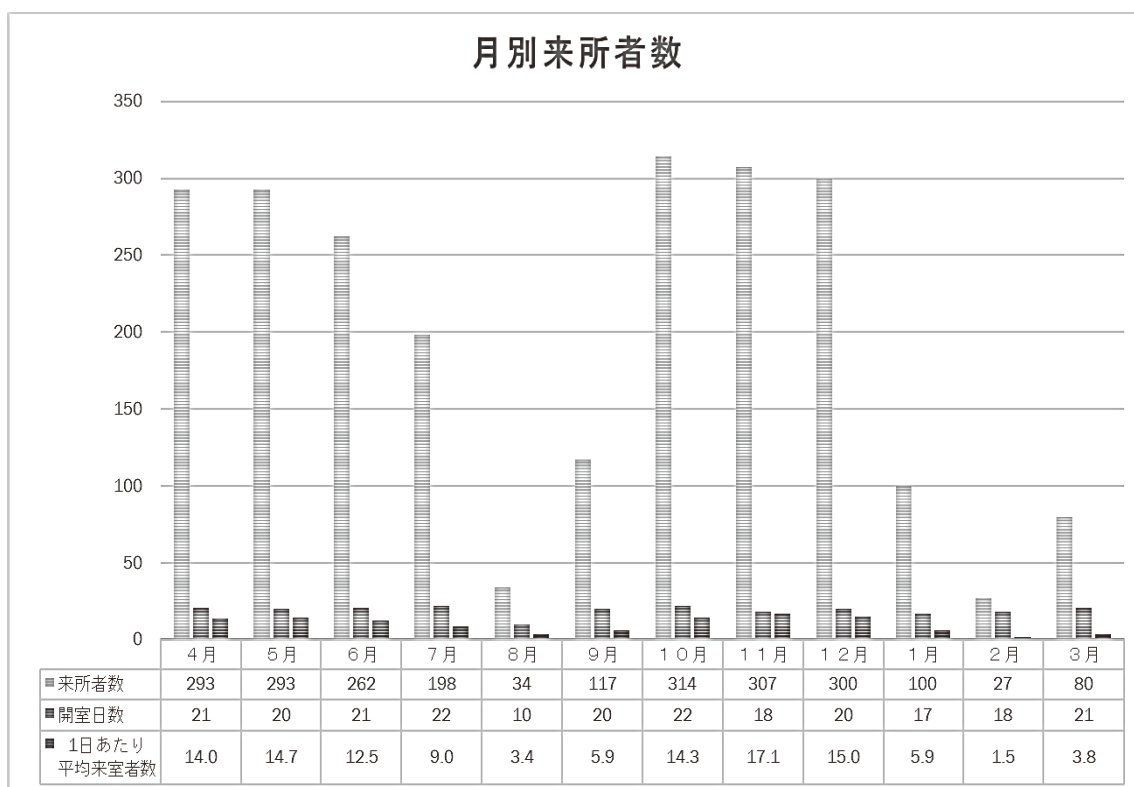
日時・期間等	活動内容	参加者 (名)
7月10日(木)・ 7月11日(金)・ 7月14日(月)・ 7月15日(火)・ 7月16日(水)	ノートテイク説明会 (大学ノートテイクプロジェクトの担当として運営)	7
8月16日(土)・ 8月17日(日)・ 8月23日(土)	災害救援ボランティア講座 於：東京大学地震研究所、本所防災館 災害救援ボランティア推進委員会主催の講座に参加	8
9月24日(水)	はじめてボランティアプログラム「ミッション：クリーンポッシブル」 本学から井の頭恩賜公園までのゴミ拾いイベントとして実施	14
9月30日(火)	社会活動支援奨学金10月選考 応募締切日	-
10月8日(水)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルなマナーを考える②」 事前ガイダンス	14
10月15日(水)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルなマナーを考える②」 ユニバーサルマナー検定3級受講	26
10月18日(土)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルなマナーを考える②」 ボランティア体験 於：新宿けやき園	14
10月20日(月)～ 10月27日(月)	秋のボランティアウィーク (1)20日(月)防災カードゲーム 18名 (2)22日(水)ユニバーサルスポーツ 28名 (3)24日(金)リサイクル活動の推進 19名 (4)27日(月)貧困問題で家計を考える 11名 (5)21日(火)、23日(木)、27日(月)防災×募金「＃マイ防災ボトル、 つくってみた」 11名	87
10月20日(月)～ 10月31日(金)	災害支援のための募金活動	-
10月28日(火)	社会活動支援奨学金11月選考 応募締切日	-
10月28日(火)・ 10月29日(水)・ 11月6日(木)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「ユニバーサルなマナーを考える②」 振り返り	14
10月30日(木)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「森林ボランティア」事前研修	9
11月8日(土)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「森林ボランティア」 ボランティア体験 於：さがみの森(神奈川県相模原市仙洞寺山国有林)	6
11月13日(木)・ 11月20日(木)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「森林ボランティア」振り返り	6
11月16日(日)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「防災・減災ボランティア」 事前研修	8
11月17日(月)	はじめてボランティアプログラム×けやき循環プロジェクト 「プランター植栽ボランティア」	16
11月25日(火)	社会活動支援奨学金12月選考 応募締切日	-
11月29日(土)	「社会課題解決へのアプローチ こども・家庭の貧困問題と私たちに できること」	17
11月30日(日)	クロスセッション：これまでとこれからをつなぐ場	21
12月2日(火)	重度障がい者当事者団体との交流会	15
12月3日(水)	ボランティアカフェ「吉祥寺のキャンドルナイトを彩ろう～サステイナブルな 竹あかり～」(成蹊学園サステイナビリティ教育研究所主催、本セン ター共催)	18

日時・期間等	活動内容	参加者 (名)
12月6日(土)	SEIKEI防災フェス 学生と考える“もしも”のチカラ	70
12月6日(土)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「防災・減災ボランティア」 ボランティア体験 於：東京都立小金井公園	6
12月12日(金)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)「防災・減災ボランティア」振り返り	6
12月15日(月)	ランチタイム手話教室	8
12月19日(金)	ボランティア交流パーティー	53
12月23日(火)	ボランティアカフェ～春休みに向けた国際ボランティア～	5
2026年 1月13日(火)	社会活動支援奨学金1月選考 応募締切日【当年度最終】	—
1月29日(木)	ノートテイク講習会(大学ノートテイクプロジェクトの担当として運営)	16
1月31日(土)	「ただいま、つなかん」映画上映会&監督と話せるワークショップ 震災から14年 民宿つなかんの物語と今私たちにできること	48
3月6日(金)	第4回関東地区大学ボランティアセンター学生スタッフ交流会	31
3月23日(月)	学生の挑戦と共創の場 社会貢献活動×プロジェクト活動 成果報告会2025	66
3月27日(金)	成蹊ボランティアプログラム(SVP)参加者のつどい	6

2 相談実績

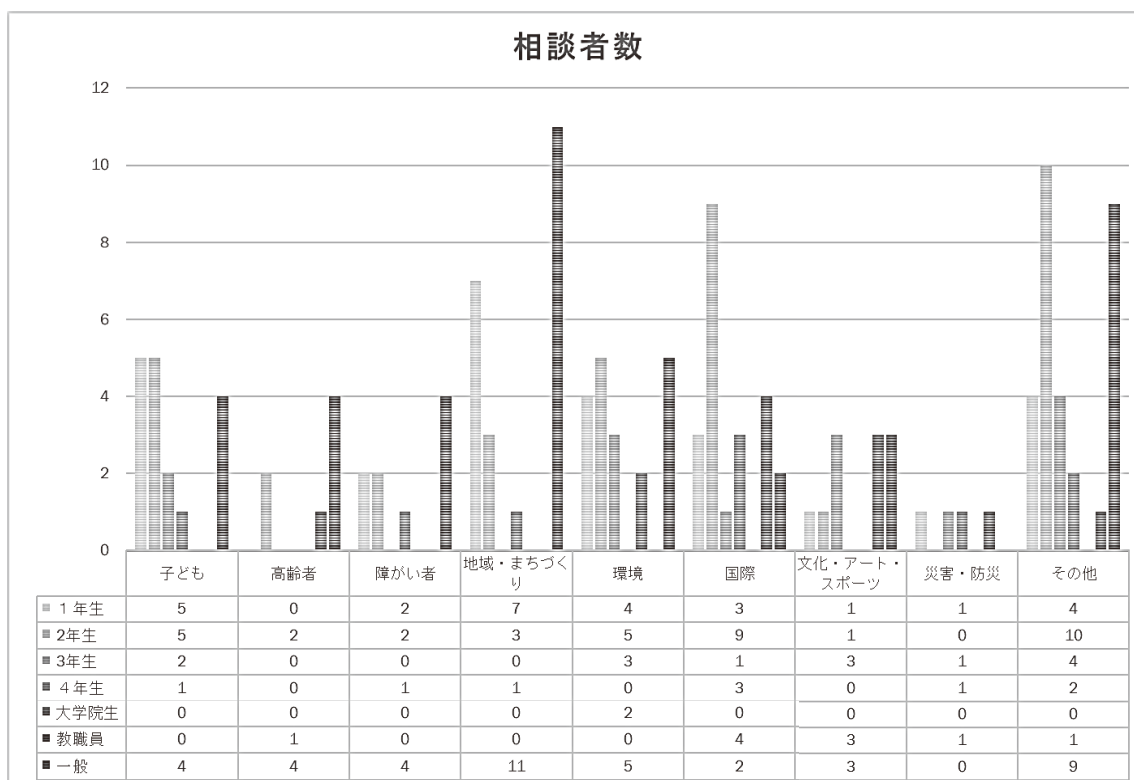
来所者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来所者数	293	293	262	198	34	117	314	307	300	100	27	80	2,325
開室日数	21	20	21	22	10	20	22	18	20	17	18	21	230
1日あたり 平均来室者数	14.0	14.7	12.5	9.0	3.4	5.9	14.3	17.1	15.0	5.9	1.5	3.8	10.1



相談内容（分野別）

	1年生	2年生	3年生	4年生	大学院生	教職員	一般	分野 合計
子ども	5	5	2	1	0	0	4	17
高齢者	0	2	0	0	0	1	4	7
障がい者	2	2	0	1	0	0	4	9
地域・まちづくり	7	3	0	1	0	0	11	22
環境	4	5	3	0	2	0	5	19
国際	3	9	1	3	0	4	2	22
文化・アート・スポーツ	1	1	3	0	0	3	3	11
災害・防災	1	0	1	1	0	1	0	4
その他	4	10	4	2	0	1	9	30
所属 合計	27	37	14	9	2	10	42	141



3 成蹊ボランティアパートナー団体制度 承認団体一覧

団体名	分野	承認日
一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク (埼玉県さいたま市)	子ども	2022 年 2 月 18 日

4 ガイドラインパス団体一覧

2025 年度 総数 92 団体 (追加 9 団体)

番号	団体名	分野
G001	一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク	子ども;
G002	府中市市民活動センタープラッツ	中間支援;
G003	NPO 法人ビーグッドカフェ	子ども・青少年;自然・環境;教育;
G004	NPO 法人 A SEED JAPAN	人権;自然・環境;平和;貧困;
G005	認定 NPO 法人地球の友と歩む会/LIFE	子ども・青少年;教育;貧困;国際協力・交流・支援;自然・環境;
G006	認定 NPO 法人こつこつ	障がい児・障がい者;社会教育・生涯学習;居場所づくり;教育;
G007	新宿区立新宿 NPO 協働推進センター	中間支援;
G008	認定 NPO 法人 JUON NETWORK	自然・環境;
G009	吉祥寺公園通り商店会	地域活性化・まちづくり;
G010	認定 NPO 法人難民を助ける会 (AAR Japan) ／エーエーアール・ジャパン	障がい児・障がい者;子ども・青少年; 人権;教育;社会教育・生涯学習;平和; 貧困;国際協力・交流・支援;食・健康; 災害・防災・被災地;
G011	NPO 法人野外遊び喜び総合研究所	子ども・青少年;教育;社会教育・生涯学習;居場所づくり;地域活性化・まちづくり;
G012	NPO 法人荒川クリーンエイド・フォーラム	子ども・青少年;自然・環境;中間支援;
G013	公益財団法人東京 YWCA 武蔵野センター	子ども・青少年;高齢者;障がい児・障がい者;人権;教育;居場所づくり;平和;国際協力・交流・支援;
G014	NPO 法人プラネットカナル	子ども・青少年;人権;貧困;
G015	NPO 法人 Pigeon	障がい児・障がい者;居場所づくり; スポーツ;地域活性化・まちづくり; 子ども・青少年;

G016	NPO 法人 NICE（日本国際ワークキャンプセンター）	子ども・青少年;高齢者;障がい児・障がい者;人権;教育;社会教育・生涯学習;居場所づくり;医療;平和;貧困;食・健康;国際協力・交流・支援;自然・環境;災害・防災・被災地;文化・芸術;スポーツ;動物愛護;地域活性化・まちづくり;中間支援;その他;
G017	NPO 法人 NPO サポートセンター	中間支援;
G018	NPO 法人 Learning for All	子ども・青少年;教育;居場所づくり;貧困;
G020	一般社団法人日本スポーツウエルネス吹矢協会	子ども・青少年;高齢者;障がい児・障がい者;社会教育・生涯学習;居場所づくり;教育;食・健康;国際協力・交流・支援;文化・芸術;スポーツ;地域活性化・まちづくり;その他;医療;災害・防災・被災地;
G021	認定 NPO 法人プラチナ美容塾	高齢者;障がい児・障がい者;
G022	認定 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク	子ども・青少年;居場所づくり;人権;教育;貧困;食・健康;地域活性化・まちづくり;
G023	認定 NPO 法人ブリッジ エーシア ジャパン (BAJ)	子ども・青少年;人権;教育;平和;貧困;国際協力・交流・支援;
G024	社会福祉法人さぼうと 21	国際協力・交流・支援;子ども・青少年;教育;居場所づくり;人権;平和;貧困;
G025	NPO 法人ペピータ	障がい児・障がい者;文化・芸術;地域活性化・まちづくり;その他;
G026	認定 NPO 法人ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン	子ども・青少年;高齢者;障がい児・障がい者;貧困;災害・防災・被災地;国際協力・交流・支援;
G027	NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会	子ども・青少年;自然・環境;
G028	認定 NPO 法人文化学習協同ネットワーク	子ども・青少年;教育;社会教育・生涯学習;居場所づくり;地域活性化・まちづくり;
G029	NPO 法人 KITARU	障がい児・障がい者;社会教育・生涯学習;
G030	NPO 法人みかんぐみ	障がい児・障がい者;
G031	NPO 法人 good!（グッド）	子ども・青少年;居場所づくり;国際協力・交流・支援;

第Ⅱ章 活動実績

G032	社会福祉法人武蔵野 デイセンター山びこ	障がい児・障がい者；
G033	社会福祉法人東京栄和会 なぎさ和楽苑	高齢者；障がい児・障がい者；居場所づくり；地域活性化・まちづくり；
G034	きりん塾	高齢者；社会教育・生涯学習；居場所づくり；食・健康；文化・芸術；地域活性化・まちづくり；
G035	チャイルド・ファンド・ジャパン	子ども・青少年；人権；教育；居場所づくり；貧困；平和；食・健康；国際協力・交流・支援；災害・防災・被災地；自然・環境；
G036	一般社団法人横河武蔵野スポーツクラブ	子ども・青少年；高齢者；障がい児・障がい者；教育；社会教育・生涯学習；医療；食・健康；スポーツ；地域活性化・まちづくり；
G037	株式会社 Criacao	子ども・青少年；教育；貧困；人権；
G038	株式会社アメディア	障がい児・障がい者；地域活性化・まちづくり；
G039	NPO 法人チャリティサンタ	子ども・青少年；貧困；
G040	NPO 法人湘南自然学校	子ども・青少年；
G041	けやきコミュニティ協議会	子ども・青少年；高齢者；社会教育・生涯学習；居場所づくり；災害・防災・被災地；地域活性化・まちづくり；スポーツ；
G043	NPO 法人みたか都市観光協会	地域活性化・まちづくり；
G044	トヨタモビリティ東京株式会社	地域活性化・まちづくり；災害・防災・被災地；スポーツ；文化・芸術；教育；高齢者；子ども・青少年；障がい児・障がい者；自然・環境；
G045	NPO 法人西東京市多文化共生センター	子ども・青少年；教育；社会教育・生涯学習；居場所づくり；平和；国際協力・交流・支援；地域活性化・まちづくり；災害・防災・被災地；人権；
G046	NPO 法人地球緑化センター	子ども・青少年；自然・環境；地域活性化・まちづくり；
G047	三鷹市東多世代交流センター	子ども・青少年；高齢者；社会教育・生涯学習；地域活性化・まちづくり；
G048	三鷹市井の頭地区住民協議会	子ども・青少年；高齢者；社会教育・生涯学習；居場所づくり；食・健康；災害・防災・被災地；文化・芸術；スポーツ；地域活性化・まちづくり；

G049	吉祥寺北コミュニティ協議会	子ども・青少年;高齢者;障がい児・障がい者;人権;教育;社会教育・生涯学習;居場所づくり;医療;平和;貧困;食・健康;国際協力・交流・支援;自然・環境;災害・防災・被災地;文化・芸術;スポーツ;動物愛護;地域活性化・まちづくり;中間支援;
G050	公益財団法人大阪ユースホステル協会	子ども・青少年;国際協力・交流・支援;文化・芸術;
G051	公益財団法人東京都教育支援機構 (TEPRO)	子ども・青少年;国際協力・交流・支援;教育;障がい児・障がい者;文化・芸術;
G052	BOCCIA BASE TOKYO (ボッチャ ベース トーキョー)	子ども・青少年;高齢者;障がい児・障がい者;居場所づくり;スポーツ;地域活性化・まちづくり;
G053	東京武蔵野ロータリークラブ	子ども・青少年;人権;教育;平和;国際協力・交流・支援;地域活性化・まちづくり;
G054	はじまりの場所	子ども・青少年;教育;居場所づくり;貧困;地域活性化・まちづくり;
G055	練馬区立関町リサイクルセンター	子ども・青少年;高齢者;教育;社会教育・生涯学習;自然・環境;地域活性化・まちづくり;
G056	一般社団法人ユメ・フルサト	子ども・青少年;教育;社会教育・生涯学習;食・健康;自然・環境;地域活性化・まちづくり;
G057	西東京市田無公民館	障がい児・障がい者;社会教育・生涯学習;居場所づくり;
G058	認定 NPO 法人生態工房	子ども・青少年;高齢者;教育;社会教育・生涯学習;自然・環境;文化・芸術;
G059	ジモッピーネット	社会教育・生涯学習;教育;子ども・青少年;自然・環境;地域活性化・まちづくり;
G060	NPO 法人 BORDER FREE	子ども・青少年;教育;居場所づくり;
G061	NPO 法人朝日キャンプ	子ども・青少年;障がい児・障がい者;
G062	一般社団法人武蔵野青年会議所	子ども・青少年;国際協力・交流・支援;災害・防災・被災地;スポーツ;地域活性化・まちづくり;文化・芸術;
G063	公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター	子ども・青少年;障がい児・障がい者;高齢者;教育;社会教育・生涯学習;自然・環境;スポーツ;

第Ⅱ章 活動実績

G064	一般社団法人ピースポート災害支援センター	自然・環境;災害・防災・被災地;
G065	認定 NPO 法人 CFF ジャパン	子ども・青少年;人権;教育;社会教育・生涯学習;居場所づくり;平和;貧困;国際協力・交流・支援;
G066	青少年問題協議会井之頭地区委員会	子ども・青少年;
G067	関前コミュニティ協議会	社会教育・生涯学習;居場所づくり;食・健康;地域活性化・まちづくり;
G068	NPO 法人アクション	子ども・青少年;教育;社会教育・生涯学習;貧困;食・健康;国際協力・交流・支援;スポーツ;
G069	NPO 法人モンキーマジック	障がい児・障がい者;スポーツ;
G070	NPO 法人 Pista	子ども・青少年;居場所づくり;
G071	社会福祉法人東京光の家	障がい児・障がい者;
G072	NPO 法人湘南マリンオーガニゼーション	子ども・青少年;障がい児・障がい者;居場所づくり;自然・環境;スポーツ;地域活性化・まちづくり;高齢者;
G073	認定 NPO 法人カタリバ	子ども・青少年;教育;居場所づくり;
G074	NPO 法人ハモニカ横丁東京	居場所づくり;地域活性化・まちづくり;文化・芸術;食・健康;
G075	一般社団法人武蔵野市スポーツ協会	子ども・青少年;高齢者;スポーツ;地域活性化・まちづくり;
G076	武蔵野の森を育てる会	社会教育・生涯学習;自然・環境;地域活性化・まちづくり;子ども・青少年
G077	NPO 法人ピアサーポートネットしぶや	子ども・青少年;障がい児・障がい者;人権;教育;社会教育・生涯学習;居場所づくり;貧困;食・健康;災害・被災地;文化・芸術;スポーツ;地域活性化・まちづくり;中間支援;
G078	一般社団法人 SEM (*niko フェス主催)	子ども・青少年;教育;食・健康;地域活性化・まちづくり;
G079	NPO 法人 森づくりフォーラム	教育;社会教育・生涯学習;食・健康;自然・環境;地域活性化・まちづくり;災害・防災・被災地;
G080	認定 NPO 法人 ESA アジア教育支援の会	子ども・青少年;人権;教育;貧困;食・健康;国際協力・交流・支援;

G081	西東京レスキューバード	地域活性化・まちづくり;災害・防災・被災地;
G082	NPO 法人りんご村	障がい児・障がい者;
G083	NPO 法人 iPledge	自然・環境;文化・芸術;
G084	公益社団法人東京都盲人福祉協会	障がい児・障がい者;
G085	一般社団法人まるオフィス	子ども・青少年;教育;社会教育・生涯学習;中間支援;地域活性化・まちづくり;
G086	公益財団法人 武蔵野市国際交流協会	国際協力・交流・支援;子ども・青少年;居場所づくり
G087	一般社団法人 小金井市観光まちおこし協会	中間支援;地域活性化・まちづくり
G088	労働協同組合ワーカーズコープ・センター事業団	子ども・青少年;高齢者;障がい児・障がい者;居場所づくり ; 国際協力・交流・支援;自然・環境;地域活性化・まちづくり
G089	杉並区児童相談所フォスタリング機関 里親子サポーターともさぼ	子ども・青少年;教育
G090	公益財団法人武蔵野市福祉公社 (武蔵野市立北町高齢者センター)	高齢者;障がい児・障がい者;人権;居場所づくり ; 貧困;食・健康;地域活性化・まちづくり ; 子ども・青少年
G091	社会福祉法人ル・プリ (あおば地域活動ホーム すてっぷ)	障がい児・障がい者
G092	特別認可法人 東村山市商工会 青年部	子ども・青少年;教育;自然・環境;災害・防災・被災地;地域活性化・まちづくり
G093	医療法人社団じうんどう	子ども・青少年;高齢者;障がい児・障がい者;医療
G094	NPO 法人れっど★しゃっふる	子ども・青少年;高齢者;障がい児・障がい者;教育;居場所づくり ; 文化・芸術;スポーツ

5 社会活動支援奨学金実績

	種類 ※	活動名称 団体名	活動内容	支給額 (円)
1	A	水球派遣授業	日 程：2025 年 6 月～10 月 活 動 地：武蔵野市内小・中学校、 西東京市内小学校 活動分野：子ども、文化・アート・スポーツ	282,480
		体育会水泳部		
2	A	菊の普及プロジェクト	日 程：2025 年 7 月～2026 年 2 月 活 動 地：愛知県田原市、豊橋市 東京都品川区 活動分野：園芸・花き産業振興、 文化・アート・スポーツ	400,000
		はなおもい		
3	A	アート作品を通じた地域貢献活動	日 程：2025 年 4 月～10 月 活 動 地：東京都武蔵野市 活動分野：文化・アート・スポーツ	16,583
		文化会美術部		
4	A	輪島市を中心とした能登半島全域における柔軟な復興活動	日 程：2026 年 3 月 9 日(月)～11 日(水) 活 動 地：石川県輪島市 活動分野：災害・防災	295,900
		成蹊大学ボランティア本部 Uni. 復興支援プロジェクト		
計				994,963

※種類…（A種）社会貢献、地域貢献に関する活動、（B種）学術的な調査研究活動

6 学内募金活動実績

名称	募金期間	募金金額（円）
「災害ボランティア・NPO 活動サポート募金」	10 月 20 日(月)～10 月 31 日(金)	35,293

※ボランティア支援センターに募金箱を設置し、期間終了後、全額を社会福祉法人中央共同募金会に寄付

7 刊行物一覧

- 『ボランティアハンドブック 2025「何かやってみたい!!」そんなあなたへ』
2025 年 4 月 1 日発行

8 報道等採録

成蹊大学社会活動支援奨学金受給団体（はなおもい）の活動がメディアに取り上げられました。

■東愛知新聞 2025 年 7 月 24 日掲載

「若い視点で探る菊の可能性」東京の成蹊大で特別講義が盛況 田原の農家と学生コラボ

■花卉園芸新聞 2025 年 8 月 15 日掲載「キク生産者の講義関心」成蹊大学の学生が招く

学生ボランティア団体サポート制度登録団体である、お芋掘りサークルの活動が関東農政局ホームページで紹介されました。

■関東農政局「農業・農村に関する活動を行っている大学生の紹介」成蹊大学～さつまいもって最高、お芋掘りサークル～

https://www.maff.go.jp/kanto/kikaku/uc/daigakusei_katsudo.html 2026 年 3 月 31 日閲覧

第Ⅲ章

資 料

1 構成員一覧

(1) 運営委員会

役職	職位等	氏名
運営委員長	学長	森 雄一
運営委員	副学長	小田 宏信
		山田 崇人
	経済学部長	大野 正智
	理工学部長・理工学研究科長	小川 隆申
	文学部長・文学研究科長	伊藤 昌亮
	法学部長・法学政治学研究科長	浅羽 隆史
	経営学部長・経済経営研究科長	上田 泰
	センター所長	境 広志
	学生支援事務室事務長	谷口 敬太

(2) 企画執行委員会

役職	職位等	氏名
委員長（所長）	法学部教授	境 広志
委員（所員）	経済学部准教授	内藤 朋枝
	理工学部准教授	岡本 亮
	文学部教授	M. ジャマール
	法学部教授	原 昌登
委員（事務長）	学生支援事務室事務長	谷口 敬太

(3) スタッフ

職位等	氏名
学生支援事務室事務長	谷口 敬太
学生支援事務室主査	菅谷 真弓
ボランティア・コーディネーター	田中 貴子
	早川 幸子
事務職員	舛田 直子

2 会議開催日程

開催日時	開催方法	運営委員会
5月7日（水）～ 5月13日（火）	メール	第1回運営委員会
6月4日（水）～ 6月10日（火）	メール	第2回運営委員会
10月8日（水）～ 10月14日（火）	メール	第3回運営委員会

開催日時	開催方法	企画執行委員会
4月22日（火）	オンライン	第1回企画執行委員会
5月20日（火）	オンライン	第2回企画執行委員会
6月17日（火）	オンライン	第3回企画執行委員会
7月15日（火）	オンライン	第4回企画執行委員会
9月16日（火）	オンライン	第5回企画執行委員会
10月14日（火）	オンライン	第6回企画執行委員会
11月11日（火）	オンライン	第7回企画執行委員会
12月9日（火）	オンライン	第8回企画執行委員会
1月27日（火）	オンライン	第9回企画執行委員会
2月24日（火）	オンライン	第10回企画執行委員会

開催日時	開催方法	定例ミーティング
4月17日（木）	対面	定例ミーティング
5月15日（木）	対面	定例ミーティング
6月12日（木）	対面	定例ミーティング
7月11日（金）	対面	定例ミーティング
9月11日（木）	対面	定例ミーティング
10月9日（木）	対面	定例ミーティング
11月6日（木）	対面	定例ミーティング
12月4日（木）	対面	定例ミーティング
1月22日（木）	対面	定例ミーティング
2月19日（木）	対面	定例ミーティング
3月26日（木）	対面	定例ミーティング

3 関連規則

成蹊大学ボランティア支援センター規則

制 定 2014年3月5日

大学評議会

最新改正 2019年5月22日

(趣旨)

第1条 この規則は、成蹊大学学則第6条第3項の規定に基づき、成蹊大学ボランティア支援センター（以下「センター」という。）に関する基本的な事項について定める。

(目的)

第2条 センターは、成蹊大学（以下「本学」という。）における学生及び教職員によるボランティア等の地域・社会貢献並びに地域交流活動（以下「ボランティア活動等」という。）に対する意識の高揚を図り、学生及び教職員が行うボランティア活動等について支援することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 学生・教職員のボランティア活動等の推進に関する企画立案、運営及び支援に関すること。
- (2) 学生・教職員のボランティア活動等の意識向上のための啓発活動に関すること。
- (3) 学生・教職員のボランティア活動等に関する教育研究活動に対する企画・支援に関すること。
- (4) 学生・教職員のボランティア活動等に関する広報及び情報発信に関すること。
- (5) ボランティア活動等に関して学長が委嘱する事項
- (6) その他センターの目的の達成に必要な事項

(構成)

第4条 センターは、次に掲げる者をもって構成する。

- (1) 所長
- (2) 所員 若干名
- (3) 事務長又は課長
- (4) ボランティア・コーディネーター
- (5) 事務職員

2 前項各号に掲げる者のほか、センターに、副所長を置くことができる。

(所長)

第5条 所長は、本学の教授のうちから、学長が任命する。

2 所長は、センターを代表し、センターの業務を統括する。

3 所長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 所長が任期途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(副所長)

第6条 副所長は、本学の専任教職員のうちから学長が任命し、又は業務を命令する。この場合において、学長は、専任職員に対し、副所長として業務を命令しようとするときは、あらかじめ学園長と協議しなければならない。

2 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるとき又は所長が欠けたときは、その職務を代理し、又はその職務を行う。

3 副所長の任期については、前条第3項及び第4項の規定を準用する。

(所員)

第7条 所員は、本学の専任教員のうちから、所長が若干名推薦し、学長が任命する。

2 所員は、センターの目的達成に必要な業務を遂行する。

3 所員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 所員が任期途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営委員会)

第8条 センターの運営に関する基本方針及び重要事項を審議するため、成蹊大学ボランティア支援センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関する規則は、別に定める。

(企画執行委員会)

第9条 センターの事業の企画執行に関する事項を審議するため、成蹊大学ボランティア支援センター企画執行委員会（以下「企画執行委員会」という。）を置く。

2 企画執行委員会に関する規則は、別に定める。

(事務の所管)

第10条 センターに関する事務は、学生支援事務室が所管する。

(規則の改廃)

第11条 この規則の改廃は、大学評議会の議を経て、学長が決定する。

第三章 資料

附 則 (2014 年 3 月 5 日制定)

この規則は、2014 年 4 月 1 日から施行する。

附 則 (2015 年 6 月 3 日一部改正)

この規則は、2015 年 6 月 3 日から施行する。

附 則 (2016 年 4 月 6 日一部改正)

この規則は、2016 年 4 月 6 日から施行する。

附 則 (2017 年 3 月 8 日一部改正)

この規則は、2017 年 4 月 1 日から施行する。

附 則 (2019 年 5 月 22 日一部改正)

この規則は、2019 年 6 月 1 日から施行する。

成蹊大学ボランティア支援センター 運営委員会規則

制 定 2014 年 3 月 5 日

大学評議会

最新改正 2019 年 5 月 22 日

(趣旨)

第1条 この規則は、成蹊大学ボランティア支援センター規則第9条第2項の規定に基づき、成蹊大学ボランティア支援センター運営委員会（以下「委員会」という。）に関し必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 委員会は、次の事項について審議する。

- (1) 成蹊大学ボランティア支援センター（以下「センター」という。）の運営に関する基本方針
- (2) センターの運営に関する重要事項
- (3) センターの事業計画及び予算編成の承認に関する事項
- (4) センターに関する諸規則の制定改廃の立案に関する事項
- (5) その他委員会が必要と認めた事項

(構成)

第3条 委員会は、次の委員をもって構成する。

- (1) 学長
- (2) 副学長
- (3) 学部長
- (4) 研究科長
- (5) センター所長
- (6) 学生支援事務室の事務長又は課長
- (7) その他委員長が必要と認めた者

(委員長)

第4条 委員長は、学長をもって充てる。

(運営)

第5条 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

2 委員会は、委員長が必要と認めた者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(議事録の作成)

第6条 委員会に議事録を備え、議事進行の過程及び審議の結果並びに決定事項を記録する。

(事務の所管)

第7条 委員会に関する事務は、学生支援事務室が所管する。

(規則の改廃)

第8条 この規則の改廃は、大学評議会の議を経て、学長が決定する。

附 則 (2014 年 3 月 5 日制定)

この規則は、2014 年 4 月 1 日から施行する。

附 則 (2015 年 6 月 3 日一部改正)

この規則は、2015 年 6 月 3 日から施行する。

附 則 (2016 年 4 月 6 日一部改正)

この規則は、2016 年 4 月 6 日から施行する。

附 則 (2017 年 3 月 8 日一部改正)

この規則は、2017 年 4 月 1 日から施行する。

附 則 (2019 年 5 月 22 日一部改正)

この規則は、2019 年 6 月 1 日から施行する。

成蹊大学ボランティア支援センター 企画執行委員会規則

制 定 2014 年 2 月 26 日

学部長懇談会

最新改正 2019 年 5 月 22 日

(趣旨)

第1条 この規則は、成蹊大学ボランティア支援センター規則第10条第2項の規定に基づき、成蹊大学ボランティア支援センター企画執行委員会（以下「委員会」という。）に関し必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 成蹊大学ボランティア支援センター（以下「センター」という。）の事業の企画及び予算の立案に関する事項

- (2) センターの事業の企画の執行に関する事項
- (3) ボランティア・コーディネーターの採用に関する事項
- (4) その他所長が必要と認めた事項
(構成)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 所長
- (2) 所員
- (3) 学生支援事務室の事務長又は課長
- (4) その他所長が必要と認めた者
(委員長)

第4条 委員長は、所長をもって充てる。

(運営)

第5条 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

2 委員長が必要と認める場合は、構成員以外の者を出席させることができる。

(議事録の作成)

第6条 委員会に議事録を備え、議事進行の過程及び審議の結果並びに決定事項を記録する。

(事務の所管)

第7条 委員会に関する事務は、学生支援事務室が所管する。

(規則の改廃)

第8条 この規則の改廃は、センター運営委員会の議を経なければならない。

附 則 (2014年2月26日制定)

この規則は、2014年4月1日から施行する。

附 則 (2016年4月20日制定)

この規則は、2016年4月20日から施行する。

附 則 (2017年4月19日一部改正)

この規則は、2017年4月19日から施行する。

附 則 (2019年5月22日一部改正)

この規則は、2019年6月1日から施行する。

成蹊大学社会活動支援奨学金給付規則

制 定 2007年2月16日

大学評議会

最新改正 2019年5月22日

(趣旨)

第1条 この規則は、成蹊大学(以下「本学」という。)の学生の社会性の向上及び人格形成の促進に寄与す

ることを目的として、学生と教員が一体となって行う社会貢献、調査研究活動等に対し給付する奨学金に關し必要な事項を定める。

2 この規則に基づいて給付する学資金を社会活動支援奨学金(以下「奨学金」という。)という。

(資金)

第2条 奨学金に要する資金は、成蹊学園奨学金基金規則に定める奨学資金をもって充てる。

(奨学金の種類)

第3条 奨学金の種類は、次のとおりとする。

- (1) A種 社会貢献、地域貢献に関する活動
- (2) B種 学術的な調査研究活動

(対象)

第4条 奨学金の受給対象は、前条各号に掲げる活動を行う学生又は学生等による団体とする。

2 前条の活動は、原則として本学に所属する専任教員の指導又は監督のもとに行われるものとする。ただし、正課における活動を除く。

(給付期間)

第5条 奨学金を給付する期間は、当該採用年度限りとする。ただし、次年度以降に再び出願することを妨げない。

(出願)

第6条 この奨学金の受給を希望する者又は団体は、次の書類を所定の期日までに学長に提出しなければならない。

- (1) 活動の種類、名称及び団体名
- (2) 代表者の氏名
- (3) 活動計画書
- (4) 予算計画書
- (5) 当該活動の指導又は監督を行う専任教員からの推薦書

(選考)

第7条 奨学金の受給者及び団体(以下「受給者」という。)は、ボランティア支援センター企画執行委員会(以下「委員会」という。)が選考し、学長が決定する。

(給付数)

第8条 採用数は、1年度あたり20件以下とする。

(給付額)

第9条 給付額は、活動計画書及び予算計画書に基づき決定する。

2 給付額は、1件あたり20万円を上限とする。ただし、学長が特に認めた場合には、40万円まで増額給付

第三章 資料

することができる。

(誓約書の提出)

第10条 受給者は、所定の誓約書を、所定の期日までに当該活動の指導又は監督を行う専任教員を経て学長に提出しなければならない。

(奨学生の責務)

第11条 受給者は、所定の期日までに当該活動に関する報告書を提出しなければならない。

(異動報告)

第12条 受給者は、次の各号のいずれかに該当するときは、所定の異動報告書を速やかに学長に提出しなければならない。

(1) 当該活動の指導又は監督を行う専任教員を変更するとき。

(2) 奨学金を受ける団体の責任者を変更するとき。

(奨学金給付資格の取消し)

第13条 受給者が次の各号のいずれかに該当するときは、学長は、委員会の議を経て、奨学金の給付資格を取り消すことができる。

(1) 個人の場合、休学、退学し、又は学則による除籍若しくは懲戒処分を受けたとき。

(2) 第11条に定める責務を果たさないとき。

(3) 正当な理由がなく、前条に定める異動報告を怠ったとき。

(4) その他委員会が活動として適当でない行為があったと認めたとき。

(奨学金の返還)

第14条 学長は、受給者が前条の規定により年度の途中においてその資格を取り消されたときは、既に給付した奨学金の全部又は一部を返還させることができる。

(事務の所管)

第15条 奨学金に関する事務は、学生支援事務室が所管する。

(規則の改廃)

第16条 この規則の改廃は、大学評議会の議を経て、学長が行う。

附 則 (2007年2月16日制定)

この規則は、2007年4月1日から施行する。

附 則 (2015年1月14日一部改正)

この規則は、2015年4月1日から施行する。

附 則 (2019年5月22日一部改正)

この規則は、2019年6月1日から施行する。

本書は、2025 年度活動実績および事例紹介を交えて本センター事業の活動報告をまとめたものです。社会貢献活動に携わっている団体、大学ボランティアセンター等の関係者の皆様にお送りしております。

本センターの事業に関わっていただいた皆様をはじめ、日頃から応援していただいている皆様に深く感謝申し上げます。

成蹊大学ボランティア支援センター 2025 年度 年次報告書

2026 年 4 月 1 日 発行

発 行 成蹊大学ボランティア支援センター

住 所 東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1

電 話 0422-37-3448

U R L <https://www.seikei.ac.jp/university/volunteer/>

印 刷 株式会社芳文社

